

編集：千里グッズの会
発行：ひがしまち街角広場

街角 アーカイブズ 広場

,07

地域の交流スポット

ひがしまち
街角広場

地域みんなで運営している、
「街角広場」
散歩の途中に、買い物帰りに、
コーヒー・紅茶等を飲みながら、
「ちょっと休憩」しませんか？
どなたでも、自由に、気軽に、
お立ち寄りください。

但し、室内は飲酒・喫煙は禁止です。

オープン時間：11時～16時まで

目次

●赤井直「ひがしまち街角広場の挑戦」

1. 千里ニュータウンと新千里東町 1

●鈴木毅「千里ニュータウン 1961」

2. 「ひがしまち街角広場」のプロフィール 15

●宮本京子「「ひがしまち街角広場」によるニュータウン再生」

3. 「ひがしまち街角広場」のあゆみ 37

4. 「歩いて暮らせるまちづくり事業」から社会実験へ 51

●山本茂，宮本京子「千里ニュータウンにおける取り組みと展望」

●赤井直，歳脇儀一，辻本明子，福岡正輝，吉村英祐

「座談会：新千里東町における社会実験「ひがしまち街角広場」」

5. 居場所としての「ひがしまち街角広場」 67

●福岡正輝「ひがしまち街角広場は住民ふれあいの場」

●松原茂樹，鈴木毅「計画された街に生まれた高齢者の居場所」

●「100 人 100 様の知恵を生かす「居場所」」

●赤井直「住民の目で見守る通学路～気軽に集まれる街角広場から！」

●中村聡樹「気が付けばオールタウン 千里ニュータウンに見る「栄枯盛衰」 第 3 回街角広場」

6. 千里ニュータウンにおけるソーシャル・キャピタル 83

●直田春夫「千里ニュータウンのまちづくり活動とソーシャル・キャピタル」

●奥居武「千里ニュータウンに育って」

●小田切真澄「活動の場・出会いの場～「街角広場」と「はんじゅく暮楽部」～」

●加福共之「ある退職したサラリーマンと千里ニュータウン」

●加福共之「千里のソーシャル・キャピタルと「社交主義」のすすめ」

7. 生活環境のリストラクチャリング 107

- 白根良子, 滋野淳治, 赤井直, 小松尚, 司会: 鈴木毅, 記録: 田中康裕「座談会 公共の場の構築」

8. 「ひがしまち街角広場」に関する研究論文 117

- 伊富貴順一「住民の視点からみるニュータウンの再生とまちづくり
～歩いて暮らせる街づくり（千里ニュータウン新千里東町地区）での取り組みを通じて～」
- 伊富貴順一, 宮本京子「ニュータウン再生における地域住民参加
～歩いて暮らせる街づくり構想推進事業「ひがしまち街角広場」の取り組みを通じて～」
- 下渡純司, 木多道宏, 舟橋國男, 鈴木毅, 李斌
「千里ニュータウン新千里東町「街角広場」における居住者の利用実態と場所の形成に関する研究」
- 立川弥生子, 舟橋國男, 鈴木毅, 木多道宏, 李斌
「「ひがしまち街角広場」を支える人々による口述からみた、生きられた千里ニュータウン」
- 張海燕, 柏原士郎, 吉村英祐, 横田隆司, 飯田匡「新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用
実態と利用者意識について～高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究～」
- 河本真希, 木多道宏, 鈴木毅「千里ニュータウン新千里東町における住環境課題の解決・展開
プロセスからみた地域の成熟について」
- 吉本一規, 木多道宏, 奥俊信, 鈴木毅, 松原茂樹
「住環境における社会空間構造の個性化～千里ニュータウンにおける近隣住区の比較考察～」
- 田中晃代「地域課題を解決するための交流の場のあり方に関する研究」
- 乾亨, 延藤安弘, 藤田忍「「生き活きとした人生」を創出する高齢者のための居場所づくり」
- 田中康裕, 鈴木毅, 松原茂樹, 奥俊信, 木多道宏
「コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察～主（あるじ）の発言の分析を通して～」

9. 地域新聞『ひがしおか』にみる「ひがしまち街角広場」のあゆみ 175

10. 「千里グッツの会」 217

11. 「ひがしまち街角広場」に関する記事・論文一覧 233

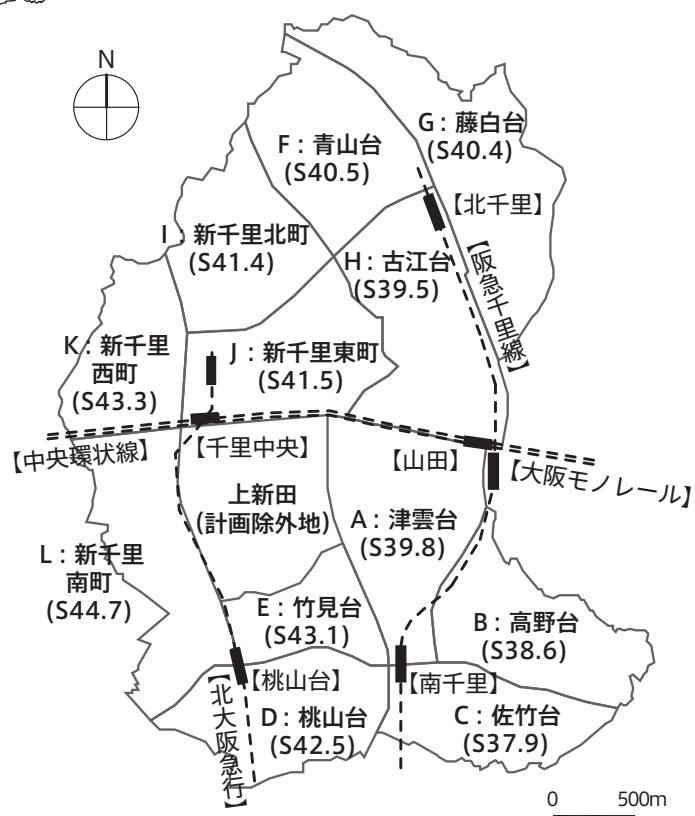
- 田中康裕「ひがしまち街角広場、二〇〇七～あとがきにかえて～」

千里ニュータウン
と新千里東町

01



千里ニュータウン



- 開発面積：約 1160ha
- 計画人口：150000 人
- ※ 人口のピークは 1975 年 5 月の 128993 人
- 入居開始：1962 年 9 月
- ※ 地図中の () は近隣センターの開設年月を表す



C: 佐竹台



E: 竹見台



G: 藤白台



L: 新千里南町

千里ニュータウン略年表

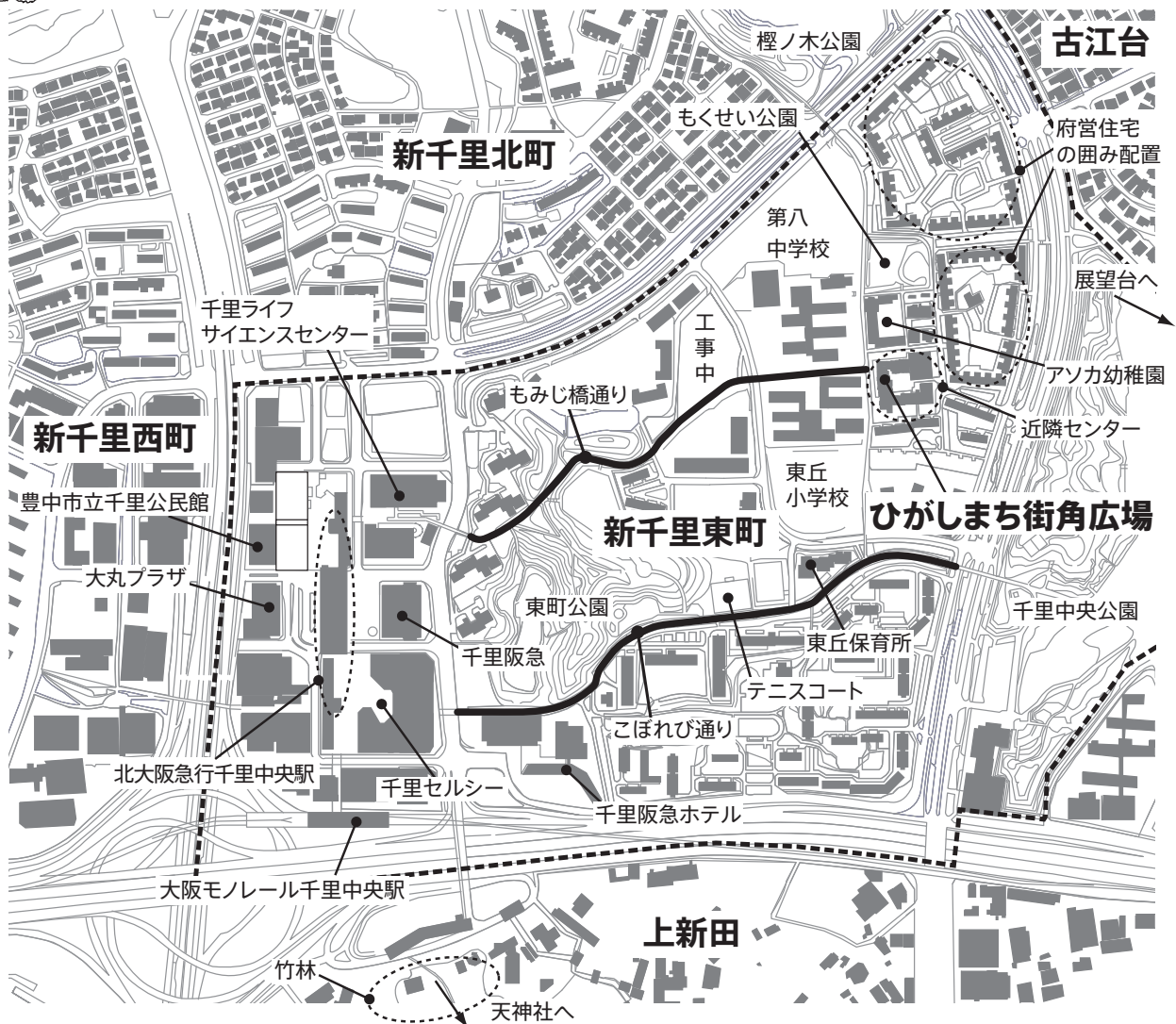
'07

年月	出来事
1957 (S32) 年 10 月 :	大阪府、豊中市・吹田市に千里ニュータウン開発計画を説明。
1958 (S33) 年 05 月 :	千里丘陵住宅地区開発事業が、大阪府の施策として正式決定。
1959 (S34) 年 02 月 :	上新田で用地買収交渉が始まる。
1960 (S35) 年 10 月 :	千里丘陵住宅地区開発事業のマスタープランが正式決定。
1961 (S36) 年 07 月 :	千里丘陵住宅地区開発事業の起工式が挙行。
1962 (S37) 年 09 月 :	C 住区 (佐竹台) より入居開始。
1962 (S37) 年 11 月 :	(財) 千里開発センター設立。千里ニュータウン町びらき式開催。
1963 (S38) 年 08 月 :	阪急千里山線、千里山～新千里山間開通。
1965 (S40) 年 07 月 :	佐竹台・藤白台・新千里山駅でロケを行なった日活映画「青春のお通り」が封切、主演は吉永小百合。
1965 (S40) 年 11 月 :	大阪府住宅供給公社発足。
1966 (S41) 年 04 月 :	新千里東町に第八中学校、東丘小学校が開校。昭和天皇・皇后両陛下千里をご視察。
1967 (S42) 年 03 月 :	阪急千里山線、北千里駅まで延長開通、北千里駅には日本初の自動改札機を採用。新千里山駅を南千里駅に、千里山線を千里線に改称。
1968 (S43) 年 04 月 :	千里中央公園オープン。
1969 (S44) 年 11 月 :	人口が 10 万人を越える。
1970 (S45) 年 02 月 :	北大阪急行、地下鉄御堂筋線と相互乗入れによる営業運転開始。
1970 (S45) 年 03 月 :	千里中央地区センターの百貨店・専門店街オープン。千里ニュータウン「新住宅市街地開発法」としての事業が完了。日本万国博覧会開催。
1972 (S47) 年 11 月 :	「千里中央セルシー」オープン。
1973 (S48) 年 05 月 :	(財) 千里開発センター、(財) 大阪府千里センターに名称変更。
1973 (S48) 年 11 月 :	千里のスーパーに突然長い行列ができ、トイレトペーパーが売り切れる。
1975 (S50) 年 05 月 :	人口が最高の 128993 人を記録。
1977 (S52) 年 07 月 :	国立循環器病センター完成。
1978 (S53) 年 04 月 :	吹田市立千里市民センター、豊中市立千里文化センター開設。
1982 (S57) 年 05 月 :	「千里 20 年まつり」開催。
1985 (S60) 年 03 月 :	南千里湯、古江台湯等の公衆浴場の閉鎖が続く。
1987 (S62) 年 11 月 :	国際居住年にちなんで「ニュータウン世界フォーラム」が開催。
1989 (H01) 年 04 月 :	千里の竹林が「大阪みどりの百景」に選ばれる。
1990 (H02) 年 06 月 :	モノレール千里中央～南茨木間開通。
1991 (H03) 年 03 月 :	「せんちゅうばる」リニューアルグランドオープン。
1992 (H04) 年 10 月 :	「千里 30 年まつり」開催。
1994 (H06) 年 04 月 :	「ディオス北千里」グランドオープン。
1996 (H08) 年 04 月 :	千里南地区センター再整備計画が始まる。
2001 (H13) 年 09 月 :	新千里東町近隣センターに「ひがしまち街角広場」オープン。
2002 (H14) 年 11 月 :	第 1 回「千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム」開催。
2004 (H16) 年 09 月 :	千里中央地区再整備事業コンペの公募開始。
2005 (H17) 年 11 月 :	(財) 大阪府千里センターの事業を (財) 大阪府タウン管理財団が継承。
2006 (H18) 年 04 月 :	吹田市立博物館にて「千里ニュータウン展」開催。
2006 (H18) 年 09 月 :	豊中市立千里公民館にて「千里ニュータウン展 @ せんちゅう」開催。
2007 (H19) 年 04 月 :	コミュニティ放送「FM 千里」が開局。

※ 参考 ○ (財) 大阪府タウン管理財団 (旧・大阪府千里センター) web サイト ○ 山地英雄『新しき故郷』NGS 2002 年



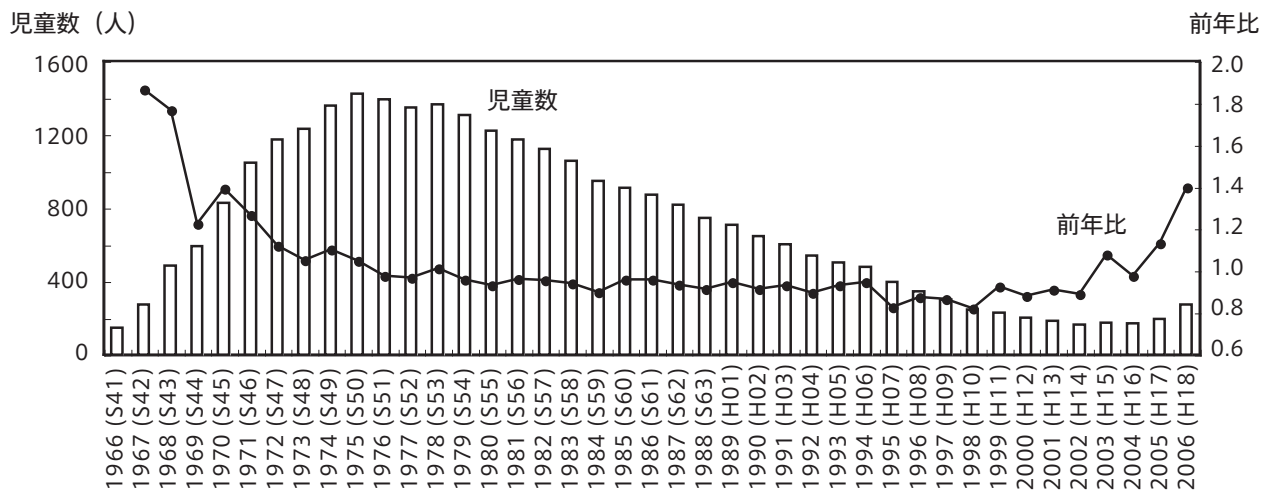
新千里東町



○世帯数：2933 世帯 / 人口：5833 人 / 65 歳以上の人口：1562 人（2005 年度国勢調査）

○集合住宅だけからなる住区。現在集合住宅の建替えが進んでいる

～ 東丘小学校児童数の推移 ～



※ 豊中市立東丘小学校 web サイトに掲載されている児童数（各年度 5 月 1 日現在の児童数）をもとに作成



千里ライフサイエンスセンターより（2002年）



千里中央公園展望台より（2005年）



東丘小学校



東丘小学校



夏祭り盆踊り大会



夏祭り盆踊り大会



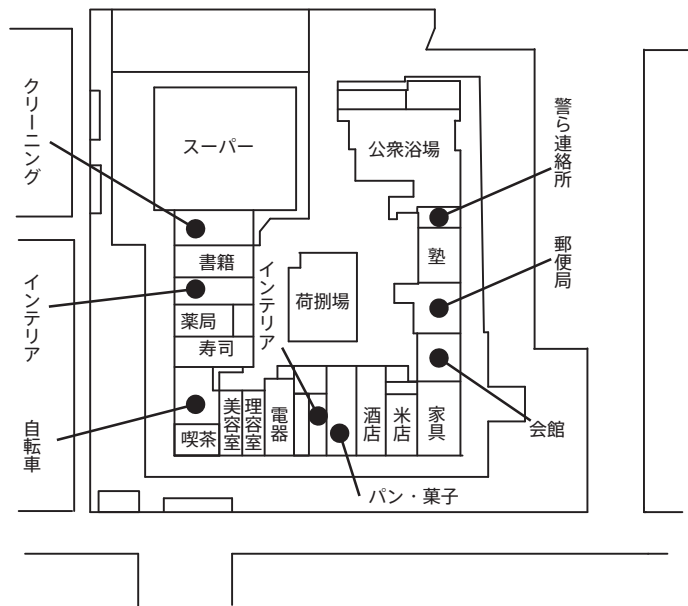
「宿泊カレーパーティー in 東丘」



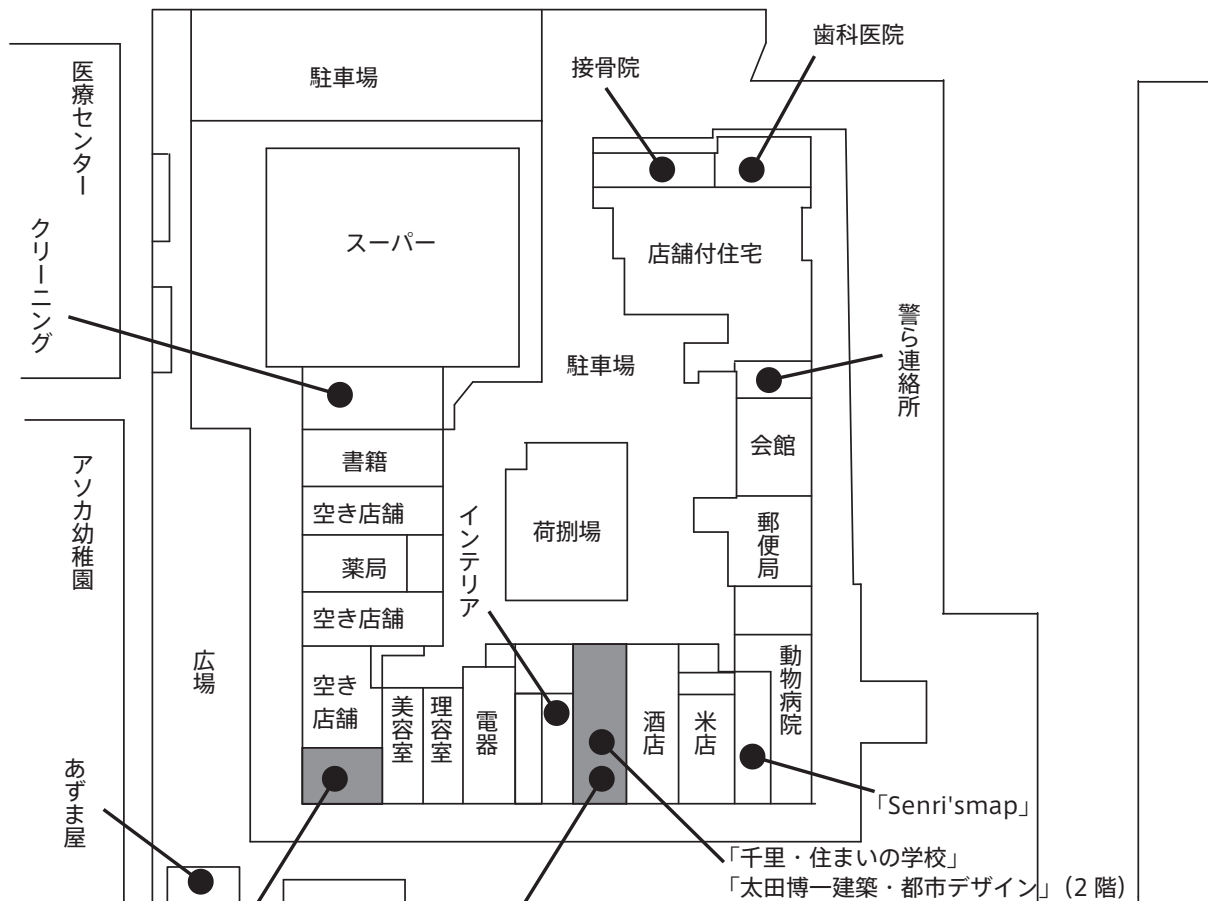
「宿泊カレーパーティー in 東丘」



新千里東町近隣センター



※1977 年当時の様子



ひがしまち街角広場
(2001.9.30～2006.5.2)

ひがしまち街角広場
(2006.5.6～2007.3.31 / 2007.5.1～)

第八中学校

東丘小学校

0 10 50m N ←

「ひがしまち街角広場」
のプロフィール

02



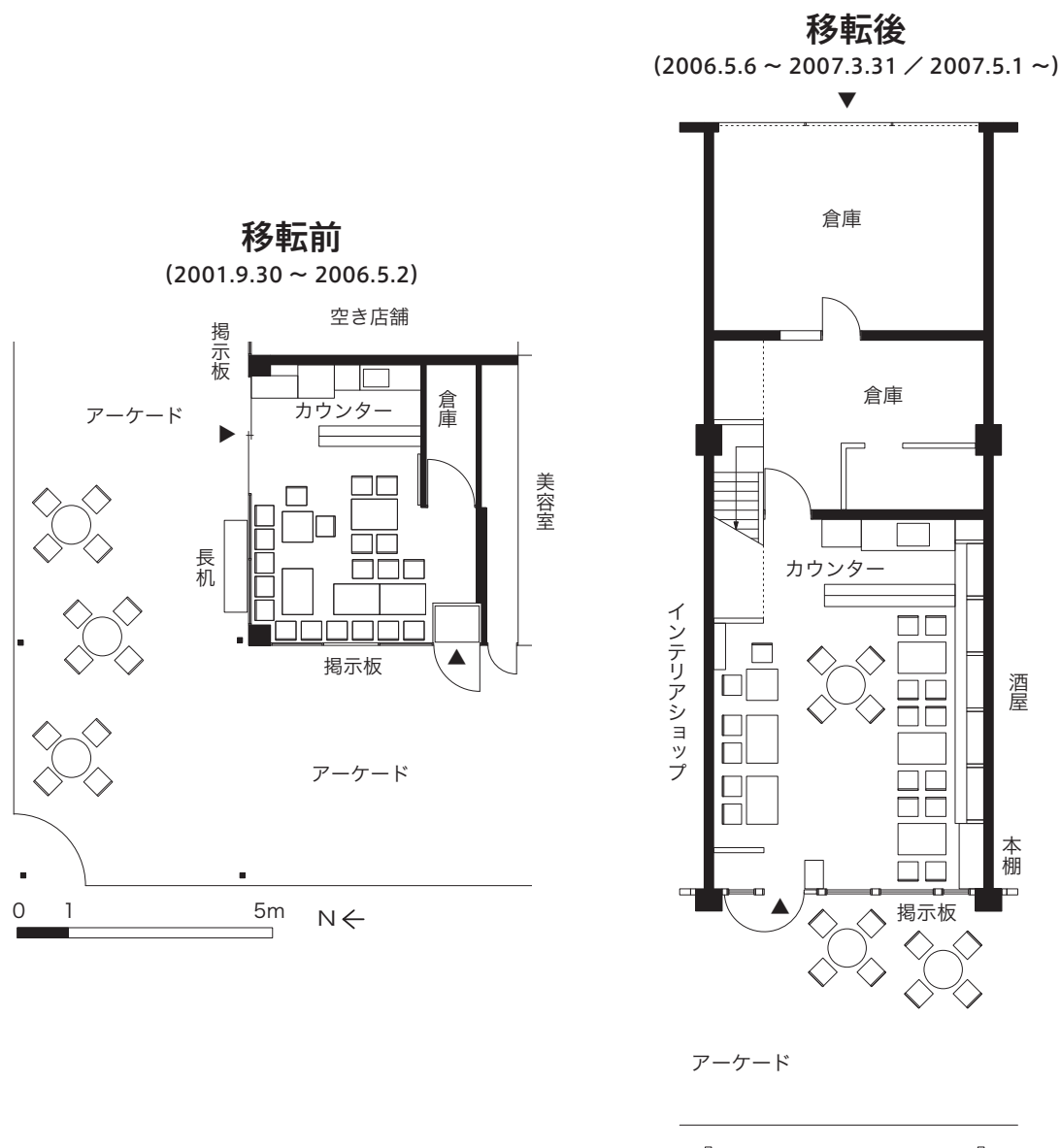
「ひがしまち街角広場」オープン



●ニュータウンの中には、そういう何となく過ごせる、みんなが何となくぶらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせるっていう場所はございませんでした。そういう場所が欲しいなと思ってたんですけど、なかなかそういう場所、こういう地域で確保することができなかったんです。

●私たちは場所確保なんてもう夢のまた夢でしたから、そのまま諦めておりましたら、豊中市がとっても苦労して1つの店舗を借りあげてくれました。そして、私たちの知らない間に、その店舗の中の造りができあがって、「一体何になるんだろう?」と思ってたら、市の方から話がありまして、「こういう場所を確保したから、地域で何か使わないか」って言ってきたんです。それで慌ててポスターを貼り出して、「こういうことを始めますので、実行委員をやってみようと思う人は集まってください」って呼びかけて、9月の20日に集まった人で実行委員会をしました。そしてオープンが9月の30日です。ですから、第1回目の実行委員会をしてから、オープンまで10日しかなかったんです。その10日の間は、ほんとに目の回るような忙しさで、今から考えたら恐ろしいようなかたちでオープンしました。

開設年月	2001年9月30日
スタッフ	約15名の女性のボランティア
オープン	月曜日～土曜日 11:00～16:00 ※16時以降と日・祝日は貸切利用が可能(使用料:500円)。
メニュー	○コーヒー(ホット・アイス) ○コー茶(ホット・アイス) ○日本茶(あたたか・冷たい) ○カルピス ○ジュース ※いずれも「お気持ち料」100円
委託販売	○クッキー:150円(「遊ゆうかぼちゃんのお家」) ○生ケーキ:100円/マドレーヌ:80円(「ふるる」) ○竹酢液・竹炭:300円(「千里竹の会」) ○千里の絵葉書:50円(「千里グッズの会」)
主な行事	○たけのご祭り:毎年4月 ○周年記念行事:毎年10月 ○街角土曜ランチ(「千里・住まいの学校」と共催):第1土曜
備考	○「写真サークル・あじさい」、「東丘ダディーズ」、「千里竹の会」、「千里グッズの会」、「千里・住まいの学校」などが活動や集まりのために利用している。 ○2007年6月11日、使われていなかった「街角広場」の2階を改修して「千里・住まいの学校」及び「(株)太田博一建築・都市デザイン」の事務所が開かれた。





ボランティアスタッフ



●コーヒー代 100 円ですのでそこからお給料なんてとても出てくるわけがありません。ですから、私は「勝手ボランティア」と言ってます。といいますのは、色んな団体とかそういうものの肩書きをはずしたフリーな方が皆さんお手伝いに来ていただいています。色々話を聞くと「自分たちが楽しいからここに来るんだ」って言ってます。きっと、義務的に「今日は「街角広場」で、お当番で入らなきゃならないんだ」っていう気持ちで入ったら、やっぱりそういうことが出てしまうんじゃないかなと思います。その代わり、ほんとのボランティアですから、スタッフとそれから来訪者との垣根は全くありません。ですから時間があれば来訪者もスタッフと一緒にテーブルでお話をします。

●私が、一番大事に言ってることは「やってるスタッフとしてエプロンかけてる者もボランティアでしょうけれども、来ていただく方もボランティアなんですよ」ってことです。一生懸命エプロンかけて待機してても、誰も来てくれなかったら「街角広場」の意味がないんです。私たちは、「街角広場」に誰も来てもらえなくなった時には「街角広場」は閉めましょ、地域に必要なのない、みなに必要とされないものは潔く閉めましょ」といつでも言ってます。

～ ボランティアスタッフの担当日 ～

年	月	日	曜日	A さん	B さん	C さん	D さん	E さん	F さん	G さん	H さん	I さん	J さん	K さん	L さん	M さん	N さん	O さん	P さん	Q さん
2007	1	5	金	●													●	●		
2007	1	6	土	●													●		●	
2007	1	9	火	●			●	●	●											
2007	1	10	水							●	●									
2007	1	11	木	●									●	●						
2007	1	12	金	●													●	●		
2007	1	13	土	●												●			●	
2007	1	15	月	●	●	●														
2007	1	16	火	●			●	●	●											
2007	1	17	水							●		●								
2007	1	18	木	●									●	●						
2007	1	19	金	●													●	●		
2007	1	20	土	●												●			●	
2007	1	22	月	●	●	●														
2007	1	23	火	●			●	●												
2007	1	24	水							●		●								
2007	1	25	木	●									●	●						
2007	1	26	金	●													●	●		
2007	1	27	土													●			●	
2007	1	29	月	●	●	●														
2007	1	30	火	●			●	●	●											
2007	1	31	水		●					●		●								
2007	2	1	木										●		●		●			
2007	2	2	金	●										●		●			●	
2007	2	3	土	●													●	●	●	
2007	2	5	月	●	●	●														
2007	2	6	火	●			●	●	●											
2007	2	7	水		●					●		●								
2007	2	8	木	●									●	●	●		●			
2007	2	9	金	●												●	●			
2007	2	10	土															●	●	
2007	2	13	火	●			●		●											
2007	2	14	水		●					●										
2007	2	15	木	●									●	●	●					
2007	2	16	金	●			●									●				
2007	2	17	土	●														●	●	
2007	2	19	月	●	●	●														
2007	2	20	火	●			●	●												
2007	2	21	水		●					●										
2007	2	22	木	●									●	●						
2007	2	23	金	●												●	●			
2007	2	24	土															●	●	
2007	2	26	月	●	●	●														
2007	2	27	火	●			●	●												
2007	2	28	水		●					●										
2007	3	1	木	●									●	●	●			●		
2007	3	2	金	●													●	●		
2007	3	3	土	●	●											●				
2007	3	5	月	●	●	●														
2007	3	6	火	●			●	●												
2007	3	7	水		●					●										
2007	3	8	木	●									●	●	●		●			
2007	3	9	金	●												●	●			
2007	3	10	土															●	●	
2007	3	12	月	●	●	●														
2007	3	13	火	●			●	●												
2007	3	14	水		●					●						●				
2007	3	15	木	●									●	●	●		●			
2007	3	16	金	●												●	●			
2007	3	17	土							●									●	
2007	3	19	月	●	●	●										●				
2007	3	20	火				●	●												
2007	3	22	木	●									●	●	●					
2007	3	23	金	●	●												●			●
2007	3	24	土													●			●	
2007	3	26	月		●	●														
2007	3	27	火	●			●	●									●			
2007	3	28	水		●					●										
2007	3	29	木	●										●				●		
2007	3	30	金													●	●			
2007	3	31	土	●			●												●	

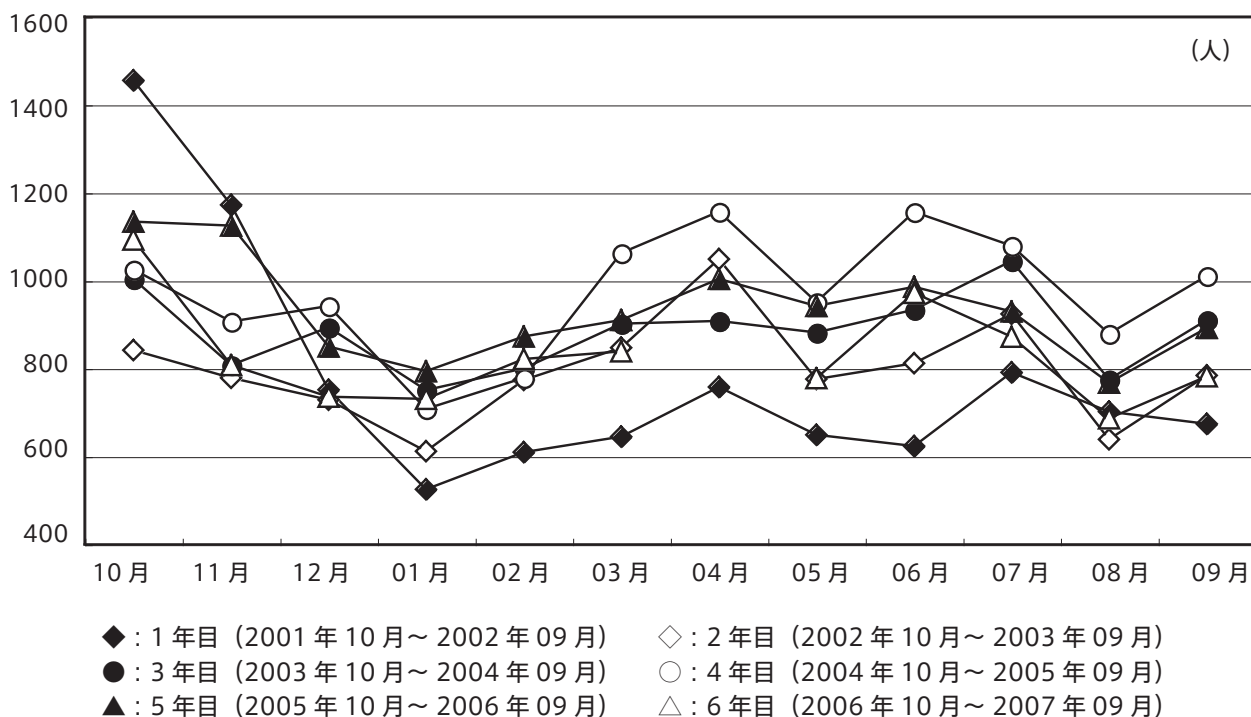
※ 日誌に、その日の担当者として名前が記されているスタッフ



● 助け合いの場ですよね。直接誰に言っていないのかわからないことを、ここで大きな声で叫べば誰かが聞いてくれる。聞いた人は、自分ができなくても、またよそに行って「あそこであんなん言うてたよ」って言ってくれる。だからここで大きな声で叫んでみる、独り言みたいな顔して大きな声で言う。そうすると誰かが聞いてくれて、またそれが、それなりにちゃんといきていく。すごくありがたい場所です。

● 60人ぐらい来ててんてこ舞いする日もあります。たったの15人しか来ない日もあります。それはそれで「街角広場」の個性だと思いますし、そういうところがあってもいいのではないかと考えています。みんなが千客万来で、誰でも入れる場所ばかりがいいのではなくて、多い日、少ない日、色々あっていいかなと思っています。

～ 1 ヶ月の延べ来訪者数の推移～



～ 1 日の平均来訪者数～

(人)	1 年目 (2001 年 10 月 ～ 2002 年 09 月)	2 年目 (2002 年 10 月 ～ 2003 年 09 月)	3 年目 (2003 年 10 月 ～ 2004 年 09 月)	4 年目 (2004 年 10 月 ～ 2005 年 09 月)	5 年目 (2005 年 10 月 ～ 2006 年 09 月)	6 年目 (2006 年 10 月 ～ 2007 年 09 月)
10 月	46.9	40.1	38.6	41.0	45.4	43.7
11 月	40.4	41.0	35.1	39.4	46.9	35.1
12 月	28.9	52.1	38.9	42.8	40.5	35.0
01 月	25.0	36.0	37.6	35.4	37.8	33.2
02 月	26.5	48.4	34.8	33.9	36.4	35.7
03 月	25.8	33.9	34.7	40.9	35.0	32.3
04 月	29.2	40.3	37.8	46.3	40.2	—
05 月	27.0	31.0	40.1	43.2	39.3	32.4
06 月	26.0	33.8	35.9	46.2	37.9	37.4
07 月	31.6	35.5	38.7	43.2	37.2	34.9
08 月	33.4	32.0	35.2	36.6	29.5	29.9
09 月	29.3	32.7	37.9	42.1	35.7	34.0
1 日の 平均	30.8	38.1	37.1	40.9	38.5	34.9

※図表の来訪者数は 1 日の「お気持ち料」の合計より算出している。そのため、水を飲みに立ち寄った子どもをはじめ、コーヒー・紅茶を注文していない人は、図表の来訪者数に含まれていない。



●ボランティアして下さってる方たちも、もう顔なじみっていうか、いろんな話が出来ますね、それがいいと思います。1人ずつ違いますよね、価値観も。だから押し付けじゃなくて、この人はこういうふうに考えてはるのかっていう、いろんな気づきもいただけて。教えてるんじゃないけれど、会話の中にいろんな世代の方の凝縮されたもんがあるっていうのかなあ、そんな感じですね。生活の知恵もたぶんあるんだろうし。しょうもない話もしてんねけど、しょうもない話の中にまた笑いがあるっていうのか、やっぱり笑えるっていうか、楽しいっていうのか。

●普通の喫茶店だったら、めいめいで新聞読んだり、あんなんするじゃないですか、そういうことじゃなくて。どういうんですか、ほんとに、憩いっていうんですか。毎日来られてる人もいます、それが楽しみで。別にここへ来て、しゃべるんじゃないかって、人の話を聞いてゆったりしてるっていうお年寄りもいてるんですね。



●小学生、中学生が、ここの中をもう風のごとく通り過ぎていくこともありますし、遊んで喉が渴いたり、学校帰りにはお水を飲みに来ます。夏なんか、暑い時は、ほんとにもう列をなして並びます。スタッフは、コーヒー出すより、子どもに水やる方が忙しいかなってような時があります。

●夕方学校から帰りましたら、「街角広場」の前の広場で子どもたちが遊びます。そこでは喧嘩もあります。色んな怪我もあります。そんな時も「街角広場」に子どもたちが入って来ます。怪我したら泣きながら「転んだ」と言ってきます。救急箱置いてますので、手当てもします。それから、喧嘩したら「おばちゃん、あいつちょっと悪いねん」と言ってきます。そしたら喧嘩の仲裁にも行きます。

●わたしがとってもうれしかったのは、小学4年生の方たちとすごく交流ができて、で、次また小学1年生の子たちと、顔と名前が少しずつわかってきて。こちらがうっかりしてても、むこうのほうから、「おばちゃん」とか言ってくれる、そういうふうな感じで。で、「運動会も見に行くな」とか言って、地域と小学校とが一緒に運動会しましたので、そのときに見せていただいたり。もう子どもの手が離れたわたくしにとっては、すごくいい関係を結ばしていただいて。



展示・掲示



●私は学校へ「せっかくだから、ここを起点として学校の情報を外に出すことを考えたらどうですか？」って働きかけて。それで「街角広場」にはいつでも学校の関係の、学校通信が貼られたり。中学生っていうのはね、男の子なんか学校からもらったお手紙出さないんですよ、親には。親にとってみたらほとんど学校からの連絡が来ないのが、「街角広場」へ来れば、その学年だけでなく、違う学年、学校全体の色々な情報が得られるって言って、それはもう最近はお母さんたちがよく読みに来ますね。

●地域の写真好きの方が、「街角広場」に展示されていた写真を見て「こんな写真を撮れるようになりたいから教えて欲しい」っていうので、写真サークルができました。そして、ずっと月1回の例会をもっています。川柳サークルはずっと前からあったんですけど、なかなか地域の方に見てもらって発表できる場所がない。ということで、最近は月1回の例会の後に川柳を短冊に書いて、それを「街角広場」に展示しています。コーヒー飲みに来た人が川柳を見ながらその川柳の批判をしたりと、それが一つの話題づくりになってます。ですから、「街角広場」から発展した色々なことが、また話題づくりになったりして、上手にサイクルできていっているなと思って私は感心しているんですけども。



●急遽移転しろということになりまして、もう必死でかけずりまわって、場所を探して。私たちとしては、根本的には「東町の近隣センターで生活できないと「ひがしまち街角広場」の意味がない」と思っていますので、近隣センターの中をほんとにもう必死の思いで探して、ご理解いただいた家主さんから場所を借りることができました。

●「街角広場」では、夢だけど絶対実現してみたい夢が配食サービスです。お母さんが入院してしまった時とか、高齢者への配食サービスができる場所を確保し実現できればいいなと思いながら、「この場所でやろうか、あの場所でやろうか」と毎回、数名のスタッフたちとそういう構想は練ってます。これは絶対に実現してみたい夢です。たぶんできるのではないかなと思いながら、日々それを目標にがんばってます。



活動の場所として



●団地にあります集会所っていうのは、要するに目的がきちりしていて、申し込んでおかないと使えないんですね。「街角広場」っていうところは便利なところで、「今日の夕方これに使いたいねんけど、貸して欲しい」って飛び込んで来た人にもすぐに貸せるような状況です。

●地域のダディーズといって、小学校の親父の会があります。そのお父さん方がどうされてるかと言いますと、土曜日の夜に家族で食事を済ましてから、各々ビールと自分自身のあてを持って来て、「街角広場」で色んな情報交換をされています。

●夜、公共の場所を借りて会議をしようと思っても、9時には帰らなきゃならないとなったら、話が終わらないうちに会議を終えないといけません。でも「街角広場」だと時間の制約がありません。ダディーズなんかは、夜中1時頃まで話してますね、見てると。そういうふうなかたちで時間制限がないものですから、PTAの会議にも、色んな役員会とか、ちょっと打合せていうのにもよく使われております。



たけのご祭り



●たけのご掘りに参加された方が、竹藪を見て、「竹藪がだんだん死んでいって、手入れをしなきゃ竹藪っていうのは死んでいくんだ」っておっしゃって、竹藪を整備できないかと長い間「街角広場」の前で話し合っておられました。その話し合いの中から「竹の会」が生まれました。「竹の会」は、今では行政からも頼りにされておりまして、公園の竹藪の整備はみな「竹の会」の方に任されておりまして。

●「竹の会」の人たちは、竹の廃材を使って、北千里高校で竹炭と竹酢液を作っておられます。できた竹炭と竹酢液は「街角広場」で販売しております。それがよく売れております。それから、「竹の会」の人たちをお願いして、廃材を使って色んな作品づくりもやっております。大人の方も「竹の会」の教室っていうのがございますし、今文科省がやっております子どもの居場所づくりでの子ども教室でも、竹を使っての竹細工教室をしております。



周年記念行事



■ 1周年記念行事：2002.10.5（土），6（日）

阪大学生による千里ニュータウンに関する研究成果の発表。第八中学校バトン部の演舞。東町住民による和楽器の演奏。

■ 2周年記念行事：2003.10.4（土），5（日）

第八中学校吹奏楽部の演奏、バトン部の演舞。「八鼓」。「千里竹の会」の活動紹介。「千里グッズの会」による絵葉書紹介。

■ 3周年記念行事：2004.10.9（土），10（日）

阪大学生による千里ニュータウンに関する研究成果・設計課題発表。東丘小学校児童・教員による「よさこいソーラン」。第八中学校バトン部の演舞。「八鼓」。「歌続」。



■ 4周年記念行事：2005.10.8（土），9（日）

第八中学校バトン部の演舞。「八鼓」。阪大学生による千里中央地区再整備事業の説明。「千里の歴史を記録する会」の活動紹介。

■ 5周年記念行事：2006.10.5（日）

「ひがしまち街角広場」の歩みをスライドショーで紹介。「八鼓」。

■ 6周年記念行事：2007.10.7（日）

阪大学生によるイギリス・ハーローニュータウンの紹介。「八鼓」。「ひがしまち街角広場」の歩みをスライドショーで紹介。



周年記念行事



● 1周年記念とか2周年記念とかいって大パーティをして。大パーティって言うと大袈裟ですけど、地域還元ということでみなさんどなたでもどうぞということで。

● 周年記念行事を開設の10月に合わせて毎年しております。その時も、200人、300人の方が見えます。で、本当に広場いっぱいになって。その時の準備なんですけども、知らない間に色んな人が来て手伝ってくれます。バーベキューコンロ6つぐらい出して、炭火を起こしてものを置いておきますと、誰かがそこを全部お世話をしていただける。気がついて終わってみれば、きれいに片付いている。でも、ふと見たら、どこで誰がいつ何をしてくれてたか全然わからない。たぶんその時のスタッフなんて10名や20名じゃないと思います。「ボランティアスタッフって何だろう」と思った時に、「いや、10名じゃないなあ、20名じゃないなあ。その時だけだったら30名、50名もボランティアスタッフがいたかもしれないな」と思います。

▼新千里東町の『街角広場』で、こどもたちがはしゃいでいる光景に、思わず心が和んだ。いや、はずんだ、といった方が正解かもしれない。

▼くわしくは4面に掲載しているのでそちらを読んでもらうとして、小学生たちがなぜ、こんなに『街角広場』に集まってくるのか、ということである。『街角広場』が開いているときはいつもにぎわうということで「こんなことはもう、何十年來のこと」だという。

▼こどもたちに「なぜここに来るの?」と聞いたら、いぶかしそうな顔をして遠ざかってしまったが、理屈ではない、居心地がいいからに決まっている。こども本人も親も、ここならだれがいるから安心とい

うこともある。

▼千里の住区には、近隣公園も児童公園も必ずある。戸外で遊ぶ環境はどこよりも恵まれているのだが、こども数人だけでは寂しいし、だれかおとなの確かな目がない限り犯罪の心配だってある。

▼『街角広場』には、まちのいろんな人がやってくる。知り合いもいる。室内からは笑いも聞こえてくる。まさに、人は人を呼ぶ。こどもたちも雰囲気にはとても敏感だ。遊具がなくても広々としたスペースがなくても、周りには楽しそうなおとながいる。こどもたちはそれでうれしいのだ。「人の和」こそなによりである。

『千里』第449号, 2002年4月1日

▼「千里ニュータウンのおみやげって、どんなものがあるの?」「特に聞かないなあ」「じゃ、みんなで開発しようよ」ということで発足したのが『千里グッズをつくる会』。昨年夏、ひがしまち街角広場。にぎやかな集まりの中で思案が始まった。

▼千里名物の竹のこと、自慢の美しい環境、文化学術の世界的拠点、素材には事欠かない。議論百出の中で、ポンと先に躍り出たのが、4面でご紹介の千里の絵はがきである。ふだんから千里ニュータウンを研究している大阪大学大学院の教員と院生が中心となって積極的に動きだしたから仕事は早い。3月から試験販売開始とあいなった。

▼この絵はがきづくりについては、早くからアイデ

アを温めていたという。海外から寄せられたり、渡航して手に入れた絵が手元にいっぱい。ワイン工場製作のワイン型絵はがきなど、形もデザインもきわめてユニークなものも多いという。しかし日本では変形版は定形外郵便となるから高くつき、広く頒布というわけにはいかない。

▼この絵はがきづくりへの挑戦は意味が深い。まちづくりに必要なコミュニティ・ネットワーク醸成にもつながる。千里ニュータウンが生まれて40年。これだけのまちで「千里饅頭」一つないのはさびしい。ユニークな千里グッズが競い合って生まれたらどれほど楽しいことか。

『千里』第460号, 2003年3月1日

▼「千里の竹について考えませんか」というEメールが千里市民フォーラムのメンバーに届いた。発信者は竹の間伐のボランティアをされている新千里北町にお住まいの方。指定された集合場所は新千里東町の長谷池。周囲は千里名物の竹林。折から、ひがしまち街角広場の人たちが豊中市の許可を得て七夕のささ(笹)竹切りをしているところ。10数人がドッキングすることになった。

▼カットしたささ竹は街角広場に立てる。まもなく学校帰りの児童たちが、競い合うように短冊に願いごとを書いて吊るす。そんな光景に心を和ませながら、竹談義が熱っぽくなっていく。中でも間伐した竹をどう扱うかが大問題。1本の親竹をかつぎ出す

だけでも数人がかりになるし、捨てる場所もない。竹細工といっても供給の方が大過剰。製品化といっても百円ショップの種類を見ていたらこりゃ大変だと思う。

▼そこで今はやりの竹炭にしては、との意見にたどりつく。焼き釜と製品化の点で難しい面が多いが、あきらめるのは早い。例えば、超大型の竹炭ろ過装置を作り、千里の用水路などに全面敷き詰めて水をきれいにできないか。奇想天外でもよい、思い切った発案が待たれる。千里の竹を守り、そして間伐の余材をどう生かすかという議論は、新しいまちづくりと関係が深いはずである。

『千里』第465号, 2003年8月1日

▼本紙今号のまちづくり特集は久しぶりに新千里東町だが、このまちほど、まちづくりに関して話題が多い住区も、全国的に見てそうあるものではない。住民の活発な動きはテレビも新聞も競って取り上げ、それが励みでさらに話題提供が増えるというリズムの良さにつながっている。

▼なぜこんなに注目されるのか。それはやはり「ひがしまち街角広場」の存在が大きい。近隣センターの空き店舗を活用して3年前にオープンしたが、コーヒーなど一杯100円のお気持ち料でちゃんとまかなえるのだから、住民のチエと努力にまず敬意を払おう。加えて居心地の良さが特筆される。

▼この街角広場はもともと住民の憩いとコミュニ

ケーションの場としてスタートしたが、東町だけではなく近隣のまちから遠方の人まで訪れ、今や「千里に関する情報交換の場」となっている。例えば阪大大学院のゼミもここを研究の一実験場として活用。千里グッズの会や千里竹の会もここで産声を上げている。

▼それがまちの住民であれ、遠くの人であれ「だれでも気安く受け入れる姿勢」が新たな人間関係と活動を生み出す原点になっている。学校帰りの小学生が、ここに立ち寄って、宿題の教えっこをしているほほえましい風景もみられる安心の場でもある。

『千里』第476号, 2004年7月1日

▼今月号4面の「千里の森の再生と夢」は、ひがしまち街角広場3周年記念の催しに参加したときに得た、とても価値あるおみやげである。当日は地元住民の手づくりによる野外バーベキューもあって、楽しい一日だったが、老若参加型のまちづくりの見本を見ているような感じでもあった。

▼大阪大学の本拠地は吹田市山田丘。北千里駅から徒歩で登校する学生も多く、千里とはお隣さん同士である。今回の「千里の森…」の記事は、大学院建築工学専攻の助教授・院生らのコーディネートスタッフと阪大工学部学生の協力によるが、スタッフの多くは、実はひがしまち街角広場ができて以来の常連さん。千里を題材としたいろんな研究成果の発

表をこれまでも何回か行ってきた。住民と一緒に製作用発行している「千里の絵はがき」も彼らの発案と実行によるものである。

▼大学院助教授らのすすめで行った今回の建築模型の発表会は、パソコンとパネルを持ち込んだの披露だったが「記事にさせてほしい」と頼むと、快く引き受けてくれたものである。発表の後、住民の皆さんや学生さんらと一緒に楽しんだ野外パーティー。阪大のみなさんも地域に密着し、千里の新たなまちづくりに寄与していることに心強さを実感した一日でもあった。

『千里』第481号, 2004年12月1日

▼ひがしまち街角広場（新千里東町）は、“新時代のまちづくり”モデルとしてすっかり全国的に知られる存在となり、見学が相次いでいる。

▼地域のコミュニケーションを深めるために、公民館や自治会の集会所、学校などが早くから拠点となっている地域はいくつもある。新千里東町もそうなのだが、街角広場がなぜ各地のまちづくりのリーダーにうらやましがられているのか、なぜ新千里東町が成功しているといわれるのだろうか。表面的な見学だけではマネができない、という人が多い。

▼理由には少なくとも3点があると思われる。一つは代表者ら中心となる人が、この広場に惜しみもなく時間を費やし身を尽くし続けていること。下校

時の子どもたちとも一緒に遊ぶ（父兄に安心感を与えている）気安さと世代を超えた毎日の交流。

▼それにもう一つ、東町近隣センターには喫茶店がないこと。飲み物代100円のカンパは貴重な運営資金であり同時にコミュニケーションツールでもある。もし近隣センターに喫茶店があったら、摩擦があつてこのツールが使えるかどうか。これら三つの内どれ一つ欠けても現在の街角広場はなかったかもしれない。後進はマネだけではできない。その地域にふさわしい企画が必要となる。

『千里』第488号, 2005年7月1日

「ひがしまち街角広場」
のあゆみ

03



「ひがしまち街角広場」のあゆみ

年	月	日	出来事
2000	8		新千里東町が、国土交通省の「歩いて暮らせるまちづくり事業」のモデルプロジェクトの対象地区に選定される。
2001	1	1	東町連協、公民分館、東丘社協、防犯東丘合同編集委員会により、地域新聞『新千里東町 ひがしおか』の第1号が発行。
2001	9	20	第1回目の実行委員会が開催される。
2001	9	30	新千里東町の近隣センターを暫定利用する社会実験として、「街角広場」の運営が開始。
2001	10	1	*「手伝いたい」と申し出た児童が何人かいた。子供に手伝ってもらう範囲で少々悩んだ。その気持ちを大事にすべきなのか？本職のペンキ屋（東町在住）が来てくださって、きれいにしてくださった。まちにはたくさんの財産があると感じました。引き出しに貼ってもらっていただくシールは、明日はってくださいそうです。
2001	10	4	*木曜日は近隣センターが休みのため、昼頃の人通りがほとんどなく、来訪者が少なかった。夕方、たくさんの子供たちがきていたので、後かたづけを手伝ってもらった。楽しんで積極的に手伝ってくれた。ペール用のゴミ袋を購入してください。飾り用のお花を近所の人が持ってきてくれた。
2001	10	6	*今日は〇〇さんが持ってきてくれたコーヒーマーカーを使ってコーヒを出しました。
2001	10	7	*地域の運動会のため、休日にしては来訪者は少ない感じでしたが、コンスタントにありました。朝一番に公団の清掃ボランティアのグループの入場がありました。80代半ばの主婦が気持ちよくお茶を飲んで話して帰られました。この場所を楽しみにしておられるようです。コーヒは、やかんでお湯を沸かして入れるのが一番便利のようです。
2001	10	11	*商店街がやすみにもかかわらず、通りかかればのぞいて入ってくる人がたくさんいた。次から次へというんな人同士の関わりができています。
2001	10	16	*本日は予想外に早くからの雨。ニッショーが休業日だったが、来訪者には変わりなかった。11月4日、午後4時すぎから〇〇サークルが文化祭の反省会に会場として使用したいとの話。20人ほどが参加するのでパイプいすを少し用意したいと思う。
2001	10	18	*中学生・高校生が多数、親しく話をする。
2001	10	21	*扉のガラス・郵便受けが割れていて危険だった。〇〇氏がテープ持参できれいにしあげてくれた。できあがりを見てほしい。
2001	10	22	*東丘小学校の校長先生が来訪し、本日の職員会議にて職員に休憩時に「街角広場」へ行ってみるよう報告があったとのこと。
2001	11	5	*〇〇さん花豆煮付けもってきてくださった。
2001	11	11	街角ミニコンサート開催。
2001	11	15	*寒くても外がいいと言う人が思ったより多い。老人の施設と思い込んでいる人が今でもあり、「ひがしおか」に記事として載せていてもあんなものは読んでいないという。やっぱり…。
2001	11	18	*阪大学生 9+2 人展、展示、話し合い。30人以上の参加者。
2001	11	22	*〇〇さんが、亡くなった母が遺っていた車椅子、紙おむつの新しいものがあるので、使って欲しいとの依頼がありました（車椅子は社協で使うか聞いてみるとの事です）。
2001	11	27	*子供がたくさん来た。北町の散歩中の人、イカ焼きを食事中、お茶を持っていったら、詳しく聞かれ、気になっていたが、わかりました。又よろしくとのこと。
2001	11	29	*雨で子供がたくさん来た。午前中、8中生がテスト帰りに5人来た。傘立てを準備します。
2001	12	4	*〇〇さんより、写真を教えて欲しいとの依頼あり。
2001	12	6	*中学生が毎日来るようになった。〇〇さんがクリスマス用電飾。

※ 年表中の[*]を付けた項目は「ひがしまち街角広場」の日記の記述



「ひがしまち街角広場」のあゆみ

年	月	日	出来事
2001	12	11	*寒さが厳しく、来訪者がすくなくて来た。暖房はなんとかかきいている様だ。湯はずっと沸かしているほうが、暖房効果がある。
2001	12	14	*3年生（小学生）9人が東町について研究調査の記録をパネル展示。子供が寒さしのぎに来る。
2001	12	19	*子供達の囲碁教室10人参加（次回からコミュニティー・ルームを利用予定）。
2001	12	24	クリスマスコンサート開催。
2001	12	25	*常連さんが来てくださってにぎやかでした。
2001	12	26	*正月しめ縄作り。〇〇さんがぜんざいを作ってくれ、来訪者に振舞った。
2002	1	7	*久しぶりのオープンであったが、待っていてくれた人々がたくさん来てくれた。
2002	1	15	*正月のおぜんざいの差し入れ（〇〇さん）。おいしく食しました。
2002	1	22	*〇〇さんが来る途中で転んで顔に打撲を。ちょっとした救急箱をもってきておいた方がよさそう。外で遊んでいる子供にも。
2002	1	25	「ひがしまち街角広場」にて、座談会『新千里東町における社会実験「ひがしまち街角広場」』開催（座談会は本冊子に収録）。
2002	1	29	*小学生一年生制作の鬼の面展示。年賀状展示。
2002	1	31	*小学生一年生の鬼の面展示中、追加展示の希望者が3人。
2002	2	4	*小学3年生郷土玩具見学。
2002	2	13	*小学生がまた一人、鬼のお面を持ってきて壁に飾ってほしいと言っておいで帰った（楽しみな様子）。どこかの中学生男子5人が紅茶をおかわりして、ひとしきり話合って帰っていった。ただで出世払いで、こんな場所があるのは良いことだなあと思った。
2002	2	28	社会実験としての運営が終了。
2002	3	1	行政からの補助金を受けない自主運営が開始。
2002	3	5	*本日より、〇〇さんの絵展示（16日至）。薄ら寒く、小雨の一日。東町会館でふれあいサロン開催日こちらも出席者が少なかったとのこと。
2002	4	21	第1回たけのこ堀り。
2002	5	31	生活環境問題研究所主催、7市11町村の特産品試食会。
2002	7	26	「千里グッツの会」、「ひがしまち街角広場」にて第1回目の会合を行う。
2002	8	24	夏祭り盆踊り大会（場所：東丘小学校校庭）。
2002	9	29	第1回東丘ふれあい運動会（場所：東丘小学校校庭）。
2002	10	5, 6	「ひがしまち街角広場」1周年イベント。
2002	11	30	第1回千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム（場所：よみうり文化ホール）開催。
2002	12	16	「千里グッツの会」、「ひがしまち街角広場」で絵葉書の展示を開始。
2003	3	1	「千里グッツの会」、「ひがしまち街角広場」で絵葉書の販売を開始。
2003	4	13	第2回たけのこ堀り。
2003	8	23	夏祭り盆踊り大会（場所：東丘小学校校庭）。
2003	9	28	第2回東丘ふれあい運動会（場所：東丘小学校校庭）。
2003	10	4, 5	「ひがしまち街角広場」2周年イベント。
2003	11	16	「千里竹の会」が発足。
2004	2	29	第2回千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム開催。
2004	4	24	「千里グッツ」の会のメンバーが中心となり、ジブラルタ生命千里ホールにて映画『ニュータウン物語』の上映会を開催。
2004	8	21	夏祭り盆踊り大会（場所：東丘小学校校庭）。「はんじゅく暮楽部」が、「ひがしまち街角広場」にて「夏休み宿題片づけ隊」を開催。
2004	8	22	「はんじゅく暮楽部」が、「ひがしまち街角広場」にて「夏休み宿題片づけ隊」を開催。



「ひがしまち街角広場」のあゆみ

年	月	日	出来事
2004	10	2	第3回東丘ふれあい運動会(場所:東丘小学校校庭)。人間環境学会(MERA)・第73回研究会開催。
2004	10	3	第3回東丘ふれあい運動会(場所:東丘小学校校庭)。
2004	10	7	「ひがしまち街角広場」に新しいカウンターが設置される。
2004	10	21	*台風23号一過。東町にも被害が。街路樹、八中の木など倒れる。
2004	10	9, 10	「ひがしまち街角広場」3周年イベント。
2004	11	2	岡山県真庭農協との地域交流、街角広場スタッフら岡山へ。
2004	11	25	「はんじゅく暮楽部」、東町会館にて小学生の放課後一時預かり開始。
2005	1	20	平成16年度大阪大学現代的教育ニーズ取組支援プログラム「リノベーションまちづくりデザイナーの養成・コミュニティ活性化プロジェクト」による地元発表会開催(場所:東町会館)。新千里東町のマップづくり、近隣センターでのコミュニティレストランなどが提案される。
2005	1	27	*今日は暖かい一日、3月中旬の暖かさ。
2005	1	31	近隣センターの「スーパー・ニッショー」が閉店。
2005	2	4	*立春だ。本日よりおひな様のかざりつけ。
2005	2	19	多摩ニュータウンにて「永山福祉亭」、「Café DoDo」見学。東京都江戸川区「親と子の談話室・とぼす」にて「座談会 公共の場の構築」開催(座談会は本冊子に収録)。
2005	2	26	第3回千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム(場所:千里朝日阪急ビルA&Hホール)開催。
2005	3	1	近隣センターの「スーパー・ニッショー」跡地に、「フードショップ青葉」が開店。*フードショップ青葉、本日より開店。長い列。人通りが多くなった。久しぶりに人通りが出来た。
2005	3	30	「第21回大阪府まちづくり功労者賞」受賞。
2005	4	9	*一気に桜が開花。千里中央公園は花見の人でいっぱい。
2005	4	11	*昨日のあたたかさに比して肌寒い一日だった。遅咲きの桜も、きのうの雨にも負けずしっかり木にしがみついている様です。今日は幼稚園の入園式。全て新入生がそろった。新しい服を来たかわいい一年生がいっぱい。
2005	4	12	*冷蔵庫の入替。その他棚など入替。
2005	4	17	第3回たけのご堀り。
2005	6	15	*〇〇さんご主人が玄関敷の敷き込み工事をして下さいました。工賃はボランティアです。
2005	6	30	*七夕の笹、短冊づくり。早速、学校帰りに子ども達が。
2005	7	1	*梅雨らしい雨、にわか雨、時としてきつく。笹が雨にぬれてかわいそう。短冊がたくさんぶらさがっています。1日発行「千里」に又「まちかど」のことが。
2005	7	2	*やっと梅雨らしい雨。でも急にきつい雨で人間はぜいたく、「もう雨ばかりはいややねえ」。でもお米の為に水の為にも雨はありがたいことなのに。短冊がたりなくなった。本日、朝から大あわてで増やす為、短冊づくり。
2005	7	26	*台風が来るらしい。一日中小雨が降り、しかし風はない。涼しい一日だった。
2005	7	20-22	阪大学生、東町在住のペンキ職人の指導を受け、「ひがしまち街角広場」前にある東屋のペンキを塗り替える。
2005	8	20	夏祭り盆踊り大会(場所:東丘小学校校庭)。
2005	9	1	『街角広場アーカイブ'05』発行。近畿大学にて日本建築学会研究懇談会「街角の居場所の創出」が開催。
2005	9	24	*台風17号が伊豆方面へ。阪神タイガースはM5。
2005	10	1	*うんどう会前日、準備で大わらわ。あした天気にな〜れ。
2005	10	2	第4回東丘ふれあい運動会(場所:東丘小学校校庭)。
2005	10	8, 9	「ひがしまち街角広場」4周年イベント。



「ひがしまち街角広場」のあゆみ

年	月	日	出来事
2005	11	8	*まにわ市へ交流会に。8:00～17:30。つるし柿づくりとおみやげ、おいしい昼のお弁当と楽しい一日。
2005	11	16	*干し柿が美味しく出来上がり、お客様に差し上げ、喜んでいただいた。
2005	11	30	「はんじゅく喜楽部」、「ひがしまち街角広場」にて1周年記念行事開催。
2005	12	12	*とても寒い一日だった。真冬なみ、10度に満たない気温。
2005	12	24	*竹の会により門松かざりが一対、立派に出来上がりました。
2006	1	11	*玄関、しめ縄、お正月かざり、〇〇さん、〇〇さんに取りはずしてもらった。14日のとんど焼に持参する。
2006	1	12	*門松の撤去、竹の会の人。
2006	1	19	*時々雪がちらつき昨日とはうって変わった寒い一日だった。
2006	1	20	*朝に雪がチラツク。又、夜から雪になるらしい。
2006	2	4	大阪大学・現代的教育ニーズ取組支援プログラム「大学のあるまちづくりシンポジウム」(場所:千里ライフサイエンスセンター)が開催。
2006	2	20	*春を呼ぶ雨なのか、冷たい雨が一日中降りつづいて、2月26日に「まにわ」から春先の便が来ると連絡があったが、今日の岡山まにわ市は雪で高速道路も止まっているようだ。
2006	2	21	*朝のくもりが一転、温(暖かい)日になった。〇〇先生の万華鏡の見本で一日盛り上がりました。みんながほしいと。分館講座にはどうなるか。
2006	2	25	第4回千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム(場所:北千里パフォーマンスホール)開催。
2006	2	26	*まにわから試食販売に大雨の中来た。もちまきをする予定だったが、出来ず残りのもちが街角にいただき、常連さんと明日分ける予定。もちつきもし、雨の中人出も多かったが、今日はコーヒーサービスはしていない。
2006	2	28	*2月も終わるのに今日は一段と寒さがきびしい。どうして、まちかどの中はこんなににぎやかなのかしら、と来る人々のふしぎ。
2006	3	3	*かぼちゃのお家がアンパンが焼けたから持って行くけど…、どうぞ、40個あつという間に売れました。
2006	3	13	*寒のもどりでとても寒く一日中雪が降っていました。明日は八中の卒業式。
2006	3	16	*冷たい雨と、野球韓国戦で負けた。アーバンライフの工事でテレビケーブル切断で2000世帯で全テレビ、その他が接続不可に。大切な韓国戦、テレビ観戦が出来ずに、ストレス溜めた人が大勢集まった。
2006	3	17	*暖かくなるといいながら一日中寒い日ばかりだ。夕刻になってやっと日が照ってきた。
2006	3	24	*今日から春休み。にぎやかに子どもが遊びだした。まだ寒い。
2006	3	30	*春のあらし。寒のもどりで大寒むの一日であった。甲子園では第一戦が延長14回で長崎、清峰の勝。PLは9回に1点で、1-0の勝。街角には風雲急な話。明日には家主と話し合いを。
2006	4	4	*急にあたたかな一日。桜があわてて開きだした。
2006	4	8	*黄砂で町はけむっている。
2006	4	11	*一日中春の雨。時にはきつく、風もあり、嵐の様な一日。
2006	4	13	*連日梅雨の様なお天気。新学期が始まりにぎやかになり、人数も多く、一年進級した子ども達も変りなく遊びに来る毎日だ。
2006	4	14	*とても寒い一日であった。四月とは思えない、3月初めごろの寒さ。明日は又雨らしい。ここしばらく(2週間)で、大阪は30分しか日照がなかったと報道されている。
2006	4	18	*春らしい一日。ポカポカと外でのコーヒーがおいしいとの声。
2006	4	22	吹田市立博物館にて「千里ニュータウン展」が開催(～6月4日)、「ひがしまち街角広場」の活動も展示される。
2006	4	23	たけのご祭り(第4回たけのご堀り)。



「ひがしまち街角広場」のあゆみ

年	月	日	出来事
2006	4	28	本日より、移転先となる空き店舗の清掃・改装を始める。
2006	5	2	近隣センター北西角での運営を終了。
2006	5	6	場所を移転して運営再開。
2006	5	18	*かぼちゃのお家からパンを売りに来た。50個のパンが1時間を待たずに売り切れた。
2006	5	27	「人間・環境学会 学会賞」受賞。
2006	5	30	*水を飲みに来る子が多くなってきた。
2006	8	15	*夏休み中なのに…。8月14日、15日は夏休み。壁に貼り付ける旧街角の地図の打合せ中に、外からコーヒー3人分の注文あり、ことわずに受けました。
2006	8	19	夏祭り盆踊り大会（場所：東丘小学校校庭）。 *夏まつり本番。台風の端の雲による雨。本当に涼しくなってほしい。蒸し暑さ一番。
2006	8	30	*旧街角の床の地図を修復し、壁にモニュメントとして設置完了。
2006	9	1	豊中市立千里公民館にて開催の「千里ニュータウン展 @ せんちゅう」のサテライト会場となる（～9月22日）。
2006	10	1	第5回東丘ふれあい運動会（場所：東丘小学校校庭）。
2006	10	4	豊中市制施行70周年、都市デザイン賞受賞。
2006	10	8	「ひがしまち街角広場」5周年イベント。
2006	10	26	多摩ニュータウンにて「ニュータウン縁卓会議」開催。
2006	11	4	「千里・住まいの学校」との共催で、「第1回街角土曜ランチ」開催。
2006	12	2	「千里・住まいの学校」との共催で、「第2回街角土曜ランチ」開催。
2006	12	22	「千里・住まいの学校」がNPO（特定非営利活動法人）の認証を受ける。
2006	12	26	*しめなわつくり、45人以上の人々。
2007	1	13	「千里・住まいの学校」との共催で、「第3回街角土曜ランチ」開催。
2007	1	20	「千里・住まいの学校」NPO法人化記念セミナー「高齢者が街で住み続けるための場所・仕組みづくり」開催。
2007	1	27	大阪大学・現代的教育ニーズ取組支援プログラム「大学のあるまちづくりシンポジウム」（場所：千里朝日阪急ビルA&Hホール）が開催。
2007	2	2	*午後大入りで満席状態がしばらくつく。
2007	2	24	第5回千里ニュータウンまちづくり市民フォーラム（場所：千里市民センター）開催。
2007	3	1	*小学生がドッチボールのあとのため水を沢山のみにくる。とてもとても良い天気。
2007	3	3	「千里・住まいの学校」との共催で、「第4回街角土曜ランチ」開催。
2007	4	14	たけのご祭り（第5回たけのご堀り）。
2007	5	1	1ヶ月の休みを経て、本日より運営再開。
2007	6	11	「ひがしまち街角広場」の2階に、「千里・住まいの学校」、及び「太田博一建築・都市デザイン」の事務所が開設。
2007	7	14	「千里・住まいの学校」との共催で、「第5回街角土曜ランチ」開催。
2007	7	20	*明日から夏休み。終業式で午前中のにぎわいことの外（子どもが）。
2007	8	11	*明日から夏休み。来週会えないからと常連さんが…
2007	8	25	夏祭り盆踊り大会（場所：東丘小学校校庭）。
2007	9	8	「千里・住まいの学校」との共催で、「第6回街角土曜ランチ」開催。
2007	9	25	*街角6周年記念行事のポスター、前売券発売。
2007	9	30	第6回東丘ふれあい運動会（場所：東丘小学校体育館）。雨のため地域の運動会のみ実施。
2007	10	7	「ひがしまち街角広場」6周年イベント。

「ひがしまち街角広場」
に関する記事・論文一覧

11

■ 雑誌記事

- 山本茂, 宮本京子「千里ニュータウンにおける取り組みと展望」・『地域開発』Vol.444, 2001年9月
- 赤井直, 歳脇儀一, 辻本明子, 福岡正輝, 吉村英祐「座談会: 新千里東町における社会実験「ひがしまち街角広場」」・『TOYONAKA ビジョン 22』Vol.5, 2002年
- 中村聡樹「気が付けばオールドタウン 千里ニュータウンに見る「栄枯盛衰」 第3回 街角広場」・『週刊朝日』2003年7月11日
- 松原茂樹, 鈴木毅「計画された街に生まれた高齢者の居場所」・『建築雑誌』Vol.118, No.1510, 2003年10月号
- 宮本京子「「ひがしまち街角広場」によるニュータウン再生」・『建築と社会』Vol.85, No.985, 2004年4月
- 「100人100様の知恵を生かす「居場所」」・『建築ジャーナル』No.1071, 2004年8月号
- 白根良子, 滋野淳治, 赤井直, 小松尚, 司会: 鈴木毅, 記録: 田中康裕「座談会 公共の場の構築」・『建築雑誌』Vol.120, No.1533, 2005年5月号
- 加福共之「ある退職したサラリーマンと千里ニュータウン」・『地域開発』Vol.489, 2005年6月
- 直田春夫「千里ニュータウンのまちづくり活動とソーシャル・キャピタル」・『都市住宅学』No.49, 2005年
- 赤井直「ひがしまち街角広場の挑戦」・『TOYONAKA ビジョン 22』Vol.8, 2005年
- 鈴木毅「千里ニュータウン1961」・『建築雑誌』vol.121, No.1546, 2006年4月号
- 赤井直「住民の目で見守る通学路～気軽に集まれる街角広場から!」・『地方自治職員研修』第40巻, No.4, 通巻555号, 2007年4月号
- 赤井直「千里ニュータウンからの活動報告②」・『第1回ニュータウン人・縁卓介護報告書』特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン, 2007年

■ 研究論文

- 伊富貴順一「住民の視点からみるニュータウンの再生とまちづくり～歩いて暮らせる街づくり(千里ニュータウン新千里東町地区)での取り組みを通じて～」・『日本都市計画学会関西支部設立10周年記念論文集』pp103-108, 2001年10月10日
- 伊富貴順一, 宮本京子「ニュータウン再生における地域住民参加～歩いて暮らせる街づくり構想推進事業「ひがしまち街角広場」の取り組みを通じて～」・『都市住宅学』No.39, pp79-84, 2002年
- 下渡純司, 木多道宏, 舟橋國男, 鈴木毅, 李斌「千里ニュータウン新千里東町「街角広場」における居住者の利用実態と場所の形成に関する研究」・『日本建築学会近畿支部研究報告集』pp429-432, 2004年6月
- 立川弥生子, 舟橋國男, 鈴木毅, 木多道宏, 李斌「「ひがしまち街角広場」を支える人々による口述からみた、生きられた千里ニュータウン」・『日本建築学会近畿支部研究報告集』pp49-52, 2004年6月
- 下渡純司, 木多道宏, 舟橋國男, 鈴木毅, 李斌「居住者の利用特性からみた千里ニュータウン新千里東町「街角広場」の地域における役割」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)』E-1分冊, pp877-878, 2004年8月
- 張海燕, 柏原士郎, 吉村英祐, 横田隆司, 飯田匡, 大野拓也「千里ニュータウンのコミュニティセンターに対する高齢者の利用意識～ニュータウンにおけるコミュニティ施設の体系的整備に関する研究～」・『日本建築学会計画系論文集』No.583, pp23-30, 2004年9月



記事・論文一覧

- 張海燕, 柏原士郎, 吉村英祐, 横田隆司, 飯田匡「新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について～高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究～」・『日本建築学会計画系論文集』No.589, pp25-32, 2005年3月
- 河本真希, 木多道宏, 鈴木毅「千里ニュータウン新千里東町における住環境課題の解決・展開プロセスからみた地域の成熟について」・『日本建築学会近畿支部研究報告集』pp93-96, 2005年6月
- 田中晃代「千里ニュータウンにおける持続可能なまちづくりの段階ごとの主体別行動指針に関する研究」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)』F-1分冊, pp1009-1010, 2005年9月
- 吉本一規, 木多道宏, 奥俊信, 鈴木毅, 松原茂樹「社会空間構造の変化から見た千里ニュータウン近隣住区の個性化プロセスに関する研究」・『日本建築学会近畿支部研究報告集』pp37-40, 2006年6月
- 吉本一規, 木多道宏, 奥俊信, 鈴木毅, 松原茂樹「住環境における社会空間構造の個性化～千里ニュータウンにおける近隣住区の比較考察～」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』E-2分冊, pp125-126, 2006年9月
- 田中晃代「地域課題を解決するための交流の場のあり方に関する研究」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』F-1分冊, pp51-52, 2006年9月
- 永江光次, 横山俊祐「空き家再生によるパブリックスペースの特性と脱施設化の可能性」・『日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)』E-1分冊, pp169-170, 2006年9月
- 乾亨, 延藤安弘, 藤田忍「「生き生きとした人生」を創出する高齢者のための居場所づくり」・『住宅総合研究財団研究論文集』No.33, pp289-300, 2007年3月
- 田中康裕, 鈴木毅, 松原茂樹, 奥俊信, 木多道宏「コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察～主(あるじ)の発言の分析を通して～」・『日本建築学会計画系論文集』NO.614, pp113-120, 2007年4月
- 田中康裕, 鈴木毅, 松原茂樹, 奥俊信, 木多道宏「日々の実践としての場所のしつらえに関する考察～「ひがしまち街角広場」を対象として～」・『日本建築学会計画系論文集』NO.620, pp103-110, 2007年10月

■ 新聞記事等

- 「歩いて楽しい街 住民自ら“実験”」・『読売新聞』2001年3月5日
- 「ひがしまち街角広場 オープン！」・『千里タイムズ』2001年10月5日
- 「世代を超えた地域交流の場に」・『リビング 吹田・箕面』2001年10月27日
- 「ひがしまち街角広場を開設」・『広報とよなか』Vol.619, 2001年11月
- 「地元の声生かす街づくりへ 空き店舗改装、「街角広場」など開設」・『産経新聞』2002年3月15日
- 「せんり」・『千里』第449号, 2002年4月1日
- 「活気づくまちかどサロン ひがしまち街角広場」・『千里』第449号, 2002年4月1日
- 「千里の再生・まちの活性化のポイントは…」・『千里』第450号, 2002年5月1日
- 「千里ニュータウン40年 NPO、住民交流の核に 喫茶店設け近所付き合い」・『日本経済新聞』2002年10月31日
- 「空き店舗を「たまり場」に活性化」・『毎日新聞』2002年11月16日
- 福岡正輝「ひがしまち街角広場は住民ふれあいの場」・『広報とよなか』Vol.631, 2002年11月
- 「せんり」・『千里』第460号, 2003年3月1日
- 「「千里グッズの会」が手づくり発行へ 千里の絵はがき」・『千里』第460号, 2003年3月1日
- 「空き店舗交流の場に再生」・『読売新聞』2003年5月15日

- 「せんり」・『千里』第465号, 2003年8月1日
- 「“千里の竹”を守り資源を生かそう」・『千里』第466号, 2003年9月1日
- 「“千里の井戸端”なぜ人気?」・『千里』第467号, 2003年10月1日
- 「千里井戸端ネット」・『千里』第470号, 2004年1月1日
- 「岡山舞台「ニュータウン物語」古里を見つめ直そう 24日千里で上映、監督と交流」・『読売新聞』2004年4月20日
- 「「ニュータウン物語」24日・千里住民が上映会」・『毎日新聞』2004年4月21日
- 「「ニュータウン物語」24日に上映会」・『大阪日日新聞』2004年4月21日
- 「映画「ニュータウン物語」監督招き千里で上映」・『朝日新聞』2004年4月21日
- 「防犯キャップ目印 子供と和やか交流」・『産経新聞』2004年5月21日
- 「団地にシニアのひろば 空き店舗、住民が独立採算」・『朝日新聞』2004年5月30日
- 「せんり」・『千里』第476号, 2004年7月1日
- 「軌道に乗る『アドプト・ロード』システム」・『千里』第476号, 2004年7月1日
- 「せんり」・『千里』第481号, 2004年12月1日
- 「千里・住まいの学校」・『千里』第487号, 2005年6月1日
- 「千里「ひがしまち街角広場」が知事賞を受賞」・『UP』第23号, 2005年6月1日
- 「せんり」・『千里』第488号, 2005年7月1日
- 「ひがしまち街角広場に知事表彰」・『千里』第488号, 2005年7月1日
- 「千里ニュータウン 43歳 シニアが担う地域づくり」・『日本経済新聞』2005年9月27日
- 「町のたまり場 新装開店! のぞいてみてね」・『アサヒファミリー』2006年5月26日
- 「第二の出発。わが街よ、ともに輝け」・『朝日新聞』2006年6月28日
- 「千里ニュータウン 高齢者世帯の住み替え支援」・『日本経済新聞』2006年7月7日
- 「高齢者が生き生き」・『日本海新聞』2006年7月9日
- 「「たまり場」から広がる活動」・『大阪日日新聞』2006年8月25日
- 「誰かが「公」を担う必要」・『大阪日日新聞』2006年8月26日
- 「NT「前史」一目で あすから千里公民分館 写真展や映画・講演」・『朝日新聞』2006年8月31日
- 「まちの歩み振り返る」・『大阪日日新聞』2006年9月5日
- 「住みよい街づくり 上新田+千里ニュータウン展示」・『アサヒファミリー』2006年9月8日
- 「人間には「居場所」が必要です」・『be on Saturday (朝日新聞)』2006年11月18日
- 「花壇囲んで地域交流」・『神戸新聞』2007年1月4日
- 「地域FM、世代をつなげ」・『日本経済新聞』2007年3月28日
- 「地域のつながり育む」・『読売新聞』2007年7月1日
- 「新生ニュータウンに生まれる世代間交流」・『アサヒファミリー』2007年7月20日

■ 地域新聞『ひがしおか』

- 「ひがしまちに 憩いの場「街角広場」オープン」・『ひがしおか』第6号, 2001年11月1日
- 「「街角広場」をのぞいてみよう」・『ひがしおか』第7号, 2002年1月1日



記事・論文一覧

- 「これからも楽しくあたたかい「街角広場」をめざして」・『ひがしおか』第8号, 2002年3月1日
- 「街角広場をのぞいてみたら、楽しいことがいっぱい!!」・『ひがしおか』第8号, 2002年3月1日
- 「街角広場情報」・『ひがしおか』第9号, 2002年5月1日
- 「街角広場」・『ひがしおか』第10号, 2002年7月1日
- 「街角広場情報」・『ひがしおか』第11号, 2002年9月1日
- 「街角広場情報 地域と共に一周年」・『ひがしおか』第12号, 2002年11月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から」・『ひがしおか』第13号, 2003年1月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から」・『ひがしおか』第14号, 2003年3月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から」・『ひがしおか』第15号, 2003年5月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から」・『ひがしおか』第16号, 2003年7月1日
- 「街角広場から」・『ひがしおか』第17号, 2003年9月1日
- 「学校と地域の連携・協働 ふれあい運動会」・『ひがしおか』第18号, 2003年11月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から」・『ひがしおか』第18号, 2003年11月1日
- 「街角広場から」・『ひがしおか』第19号, 2004年1月1日
- 「「ひがしまち街角広場」…」・『ひがしおか』第20号, 2004年3月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第21号, 2004年5月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第22号, 2004年7月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第23号, 2004年9月1日
- 「ひがしまち街角広場 おかげさまで三周年」・『ひがしおか』第24号, 2004年11月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第25号, 2005年1月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第26号, 2005年3月1日
- 「街角広場が知事表彰」・『ひがしおか』第27号, 2005年5月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第28号, 2005年7月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第29号, 2005年9月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第30号, 2005年11月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第31号, 2006年1月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第32号, 2006年3月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第33号, 2006年5月1日
- 「「ひがしまち街角広場」はどんな所??」・『ひがしおか』第34号, 2006年7月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第35号, 2006年9月1日
- 「ありがとう!! 6年目に入りました」・『ひがしおか』第36号, 2006年11月1日
- 「ひがしまち街角広場から」・『ひがしおか』第37号, 2007年1月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第38号, 2007年3月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から…」・『ひがしおか』第39号, 2007年5月1日
- 「「ひがしまち街角広場」から」・『ひがしおか』第40号, 2007年7月1日
- 「真夏の街角広場は…」・『ひがしおか』第41号, 2007年9月1日
- 「街角広場から」・『ひがしおか』第42号, 2007年11月1日

ひがしまち街角広場、二〇〇七 ～あとがきにかえて～

田中康裕（千里グッズの会・大阪大学）

『街角広場アーカイブ'05』を発行して早くも2年になる。この2年間には様々なことがあったが、まずあげなければならないのは2006年5月に「街角広場」が移転したことである。移転作業は地域の多くの人々の手によって行われ、初めはシャッターを開けるだけで埃が舞っていた空き店舗が1週間程でみるみるきれいになっていった（写真1）。この移転作業へ関わる中で、地域の力とはこのようなもののことをいうのだと気づかされた。

同じ2006年の4月には吹田市立博物館で「千里ニュータウン展」が、9月には千里中央の千里公民館で「千里ニュータウン展 @ せんちゅう」が開催された。「千里ニュータウン展 @ せんちゅう」の際には「街角広場」がサテライト会場となり、それにあわせて移転前の「街角広場」の床に描かれていた千里ニュータウンの地図が、モニュメントとして設置された（写真2）。

2007年には、6月に「NPO 法人千里・住まいの学校」と「(株) 太田博一建築・都市デザイン」の事務所が「街角広場」の2階に、9月にミニコミ紙「Senri'smap」の事務所が「街角広場」の並びの空き店舗にオープンした。徒歩で買い物などの日常生活が送れるようにと考えられ計画された近隣センターは、地域に根差した仕事の間として、活動の拠点として新たな役割を担いつつある。

この冊子は、『街角広場アーカイブ'05』に以上のような2年間の出来事の記録を追加し、内容を再構成したものである。編集においては、新聞・雑誌の記事や研究論文だけでなく、地域新聞や運営日誌、写真などを幅広く収録するように心がけた。一見すると内容が統一されていないように思われるかもしれないが、それは「街角広場」の歩みが多様であることの現れだと思う。この冊子の巻末に、さらに文章を書き加えることは蛇足になるかもしれないが、建築計画の分野に身を置き「どのような質の場所が実現されているか」に注目しながら「街角広場」に関わってきた者にとって、「街角広場」が今どのように見えているのかを、そして、今どのようなことを考えているのかを以下にまとめてみたい。

●地域の人々にとっての「街角広場」の意味

非常に小規模であり、また、いわゆる専門家によって運営されている場所でもないが、「街角広場」は1つの観点からだけでは捉えきれないような豊かな意味をもつ場所になっている。ここでは、地域の人々にとってどのような意味をもつ場所になっているのか、という観点から「街角広場」についてみていきたい。



(写真1) 移転作業の様子



(写真2) モニュメントとして設置された移転前の「街角広場」の床



移転前の様子



移転後の様子

(写真3) 思い思いに居られる場所



(写真4) 「街角広場」の目的

①思い思いに居られる場所

「街角広場」は人々が気が向いた時にふらっと訪れ、ゆっくりと過ごせる場所になっている。「街角広場」を訪れた人は仲間同士で、あるいは居合わせた人々やボランティアスタッフとおしゃべりすることができる。そうしたおしゃべりには加わらず、他の人々のおしゃべりに耳を傾けたり、1人で本や新聞を読んだりすることもできる(写真3)。

赤井：15、6年前から、……、そのまちで、歳をとった人がどういうふう
に過ごしていくのがいいかなってことを考えるようになった時に、
ニュータウンの中には、そういう何となく過ごせる、みんなが何となく
ぶらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせるっていう場所はございません
でした。そういう場所が欲しいなと思ってたんですけど、なかなかそ
ういう場所、こういう地域で確保することができなかったんです。

ニュータウンとは、生活を「学ぶ」、「費やす」、「遊ぶ」といったいくつかの
機能に分解し、それぞれの機能に対応する施設を(例えば、「学ぶ」施設とし
て図書館を、「費やす」施設として商業施設を、「遊ぶ」施設として劇場や体育
館を、というように)設置することによって作られた街だといえる。このよ
うな近代の計画論においては、地域の人々が「交流する」ことを目的とする集
会所や公民館と「街角広場」(写真4)はともに交流施設、あるいは、コミュニ
ティ施設として一括りにされてしまうことになる。けれども「そこにどのように
居られるか」に注目すれば、人々が思い思いに居られる「街角広場」は、予
定を立ててから(場合によっては鍵を借りてから)何らかの活動に参加するた
めに訪れる集会所や公民館よりも、商業施設であるカフェに近い。このこと
を考えると、「街角広場」は「交流する」、「学ぶ」、「遊ぶ」、「費やす」と
いう生活機能によって分類された従来の施設の枠組みには当てはまらないこ
とがわかる。このとき、「街角広場」を従来の枠組みに無理に当てはめようと
するよりも、従来の枠組みそのものを再考することの方が大切だろう。上
にあげた赤井さんの話は、交流施設、教育施設、商業施設といった機能によ
る施設分類が、地域の人々の暮らしに応じた意味ある分類になっているの
か? 立派な施設を設置するだけで人々の暮らしは豊かなものになるのか? とい
うことへの大きな問題提起である。

それにしても、地域の人々が長い間求め続けてきた場所を、(建築計画の)
専門家はなぜ作らなかったのか? それとも、作れなかったのか? 建築計
画を専攻してきた者として、この赤井さんの言葉は深く受けとめなければ
ならないと思う。

②自分の役割がそこにある場所

「街角広場」では毎年4月に「たけのご祭り」が(写真5)、毎年10月には
周年記念行事が行われている(写真6)。これらの行事の時にはボランティア
スタッフと、普段はお客さんとして「街角広場」を訪れる人々が一緒にな
って準備や後片付けをしている光景が見られる(写真7)。先に述べたように、

2006年の移転作業も多くの人々の協力によって行われた（写真1）。

赤井：[周年記念行事の時]知らない間に色んな人が来て手伝ってくれます。

それからあの、バーベキューコンロ6つぐらい出してそこで、……、炭火を起こしてものを置いときますと、誰かがそこを全部お世話をしていただけ。気がついて終わってみれば、きれいに片付けてる。でも、ふと見たら、誰も、どこで誰がいつ何をしてくれてたか全然わからないような。たぶんその時のスタッフなんて10名や20名じゃないと思います。……、「ボランティアスタッフって何だろう」と思った時に、「いや、10名じゃないなあ、20名じゃないなあ。その時だけだったら30名、50名もボランティアスタッフがいたかもしれないな」と思うようなかたちで「街角広場」をやっております。

大きな行事の時だけではなく、日常の水汲みやテーブルの後片付けを手伝う人もいます。写真を展示したり、竹細工を展示したりする人もいます。パンを焼いたからとパンを差し入れたり、千里中央まで行ったからとたこ焼きを差し入れたりする人もいます。このように、「街角広場」は商業施設としてのカフェのように訪れた人々がお客さんとして思い思いに居られるというだけの場所ではない。人々が「自分にはこれができる」という自分なりの役割を見出し、その役割を通じて関わることでできる場所でもある。もちろん、ボランティアスタッフには日々の運営を成立させるという大きな役割がある。

赤井：男性で何かことあるごとにすぐ駆けつけてくれる方、「もう、ちょっとここペンキがはげた」言ったらペンキを塗りに来てくれる方、「ここが外れてる」と言ったらトンカチしに来てくれる方、「重たいもん持たなあかんねん、重たいもん動かす」って言ったら重たいもの、あの、便利な場所なんです。……、私が「ここをこうしたいんだけどなあ」と言ったら誰かがしに来てくれる。そういうスタッフがこれ、これはもう特定できません。きっとその辺に、あの、道にいる人声掛けたら皆入って来てくれますので。

地域に関わるとは、自分なりの役割をそこに見出すことであるとするならば、ボランティアスタッフとして運営に携わったり、水汲みを手伝ったり展示したりしている人は既に地域に関わっていることになる。「街角広場」は、人々が地域に関わるための様々な入口、あるいは、隙間を見出すことができる場所になっているといえる。

③活動を始めたり、参加したりするきっかけになる場所

「街角広場」は「写真サークル・あじさい」、「東丘ダディーズクラブ」、「千里竹の会」・「千里・住まいの学校」、「千里グッズの会」などの団体にとっての活動の場所でもある。こうした活動に参加するために、あらかじめ予定を立ててから「街角広場」を訪れる人々もあり、この場合「街角広場」は集会所や公



(写真5)「たけのご祭り」(毎年4月)



(写真6) 周年記念行事 (毎年10月)



(写真7) 周年記念行事の準備



写真、絵画、竹細工、竹炭、千里の絵葉書などが展示、販売されている
(写真 8) 展示・販売



大学の留学生と地域の人々とが交流することを目的とする集まり。「街角広場」と「千里・住まいの学校」との共催により開かれている
(写真 9) 「街角土曜ランチ」

民館と同じような意味をもつ場所になっている。

ただし、「街角広場」は集会所や公民館のように事前に予約することなく借りることができ、時間を気にせず夜遅くまで利用することができる。禁煙ではあるが、夜になるとアルコールを飲むことができる。このように「街角広場」は非常に自由に利用できる場所である。

赤井：まあ団地にあります集会所っていうのは、要するに目的がきっちりしていて、申し込んでおかないと使えないんですね。「街角広場」っていうところは便利なところで、「今日の夕方これに使いたいねんけど、貸して欲しい」って飛び込んで来た人にもすぐに貸せるような状況ですので、そういう利用もあります。

赤井：今は、PTA その他の会合は、夜行われることが多いんですね。ところが、……、色んな施設は 9 時になったら、……、出て行かなきゃなりません。ところが今の「ダディーズの」お父さん達は、夜 8 時ぐらいからその場所で会合して、まあどうかしたら、夜中の 1 時、2 時まで、まあ熱心に、アルコール片手に色んな協議がなされて、また、そのお父さんたちが催す小学校の行事になったりします。

「街角広場」は地域の人々が活動の成果を自由に展示したり、販売したりできる場所でもある（写真 8）。「千里グッズの会」は千里ニュータウンの絵葉書を販売しているが、「街角広場」のように自由に絵葉書を販売できる公共施設は少ない。多くの公共施設では、その趣旨によらず一切の売買行為が禁止されているのである。また、「街角広場」で行われている活動の中には、「街角土曜ランチ」（写真 9）や「写真サークル・あじさい」のように、喫茶と並行して行われているものもある。

このように成果を展示・販売している活動や、喫茶と並行して行われている活動があるため、お茶を飲むためだけに「街角広場」を訪れる人々でも、地域でどのような活動が行われているのかに触れることができる。

④ 地域の人々と顔見知りになれる場所

自身の経験を振り返れば、「街角広場」で顔見知りになった多くの人々を思い浮かべることができる。ただし、「名前は〇〇で、出身は〇〇で、趣味は〇〇で…」と自己紹介をして顔見知りになったわけではない。千里の絵葉書を持って行ったりコーヒーを飲みに行ったりと、何度も「街角広場」に行くうちに自然に顔を覚え、また、覚えてもらったのである（きちんと自己紹介し合ったわけではないので、あるボランティアスタッフの方の名前をしばらく間違えて覚えていたこともあった。挨拶もするし、話をしたこともあるが未だに名前を知らない人もいる）。自身の経験を書いたが、他の方々も同じような経験をされているのだと思う。実際に「『街角広場』では自己紹介しなくても色んな人と話せるのがいい」という声を聞いたこともある。

また、学校帰りに水を飲み立ち寄るなど、子どもたちも日常的に出入りす

る「街角広場」は、子どもと大人が世代を越えて顔見知りになれる場所でもある（写真10）。

赤井：旧市街と違って私たちの街は、3世代同居っていうのはほとんどないですね。……。そしたら、世代間交流っていうのはね、……地域でやるわけですよ。そしたら、お互いお客さん同士でね、イベントですから。で、こうやってこう座ってるんですけども、だからそれが終わってから、また道で会っても、あの時会ったおじいちゃんおばあちゃんと子どもたちが、気軽に道であっても挨拶して接触するかっていったら、そういうことはないですね。イベントの時だけ。「お肩を叩きましょ」って言ったらお肩を叩くんだけど、誰の肩叩いたか、誰に叩いてもらったかも知らないようで、道で会っても「この間ありがとう」の一言もお互いに出ない。そんな世代間交流なんて私は意味がないって言って。「街角」へ来れば子どもも出入りする。そしたら、自然と年寄りとか色んな年代の人が来ますから、そういう人との接触の中で自然に顔見知りになって、道で会っても話をする、挨拶をするっていう場所ができてくるだろうと思ったら、やっぱりそのようになってきたみたいで、……

もちろん、「街角広場」で顔見知りになった人と、その後、仲間のようになれることもあるだろう。ただし、「街角広場」が地域に開かれていることの意味は、地域の人々が（仲間になるかどうかに関わらず）互いに顔見知りになれるということ自体にある。

地域で仲間を作ることは大切なことである。けれども、地域の人々みなと仲間になる必要はない。そもそも地域の人々みなと仲間になるのはそんなに簡単ではないし、「仲間になろうとしていじめられ、仲間にしようとしていじめる」^{*1)}ということだってある。だから、地域の人々みなと仲間になることを夢見るよりも、道を歩いていて「こんにちは」、「今日はいい天気ですね」と声をかけ合うことができるような、（仲間ではないが）顔見知りの人を増やすことの方がずっと大切である。地域には、仲間でないと居づらい思いをする場所だけでなく、無理に仲間になろうとしなくても「ここに居てもいいんだ」と思える場所も必要である。このような観点から地域を見まわしてみると、仲間同士で過ごせる場所はたくさんあるけれど、地域の人々と顔見知りになれる場所や、顔見知りになった人とその後もずっと顔見知りのままでいることが許される場所というのは意外に少ないのではないだろうか。このような状況にあって、「街角広場」が地域に開かれていることの意味は大きい。

地域は「他の人々を人間として知らねばという強迫的な衝動なしに人々と一緒にいることが意味のあるものになるフォーラムでなければならない」^{*2)}と思う。

⑤様々な求めに対応してもらえる場所

「街角広場」は何か困ったことがあれば助けを求めて駆け込むことができる場所である。例えば、仕事を失い電気とガスを止められた人が「街角広場」に



（写真10）子どもにとっての「街角広場」

*1) 森毅『社交主義でいこか』青土社、2000年

*2) リチャード・セネット（北山克彦、高階悟訳）『公共性の喪失』晶文社、1991年

*3) 赤井直, 歳脇儀一, 辻本明子, 福岡正輝, 吉村英祐「新千里東町における社会実験「ひがしまち街角広場」」・『TOYONAKA ビジョン 22』Vol.5, 2002 年

「街角広場」以外の喫茶スペースにおいても、これと同じ意味で「駆け込み寺」という言葉が用いられているのをしばしば耳にする。厳密に言えば、困ったことがあれば助けを求めることができる場所を「駆け込み寺」と呼ぶことは誤りであろう。網野が「近世、女性からの離婚請求を実現しうる場として知られた縁切寺、近世から戦国期に遡ると一層その数を増す、科人あるいは下人・所従等の走入を公認された駆け込み寺である。……。まさしくこれは、縁を積極的に切る、「有縁」であることを拒否しうる場にほかならない」と述べているように、「駆け込み寺」は「無縁所」であったとされる。

「無縁所」について網野は、『「無縁」『公界』『楽』という言葉でその性格を規定された、場、あるいは人（集団）の根本的な性質は、……。主従関係、親族関係等々の世俗の縁と切れている点にある」と述べている。ここで、「ここに入るボランティアは、みな袈裟いで、肩書き脱いで、個人として入りましょうということにしました」、「高齢者というんじゃなくて、地域の人となたてものコミュニティっていつてつくったんです」という赤井さんの話に注目すれば、運営に既存の組織を持ち込まないようにしたり、属性に関わらずどのような人でも受け入れるようにしたりすることが意識されている「街角広場」には、「世俗の縁と切れている」ことを根本的な性質するような「無縁・公界・楽」の側面があると考えてもよいように思う。

この点に関してこれ以上議論する力はないが、「有主・有縁—私的所有が、無主・無縁の原理—無所有に支えられ、それを媒介としてはじめて可能になるという事実は、きわめて本質的な問題を提示している」という網野の指摘は、地域におけるパブリックな場所のあり方を今後考えていくうえで極めて示唆に富んでいるように思われる。網野は「無縁・公界・楽」について次のようにも述べている。「無縁・公界・楽の場、及び人の特徴をまとめてみたが、このすべての点がそのままに実現されたとすれば、これは驚くべき理想的な世界といわなくてはならない。俗権力も介入できず、諸役は免許、自由な通行が保証され、私的隷属や貸借関係から自由、世俗の争い・戦争に関わりなく平和で、相互に平等な場、あるいは集団。まさしくこれは『理想郷』である（網野善彦『増補 無縁・公界・楽』平凡社ライブラリー、1996 年（平凡社、1978 年）。網野善彦『日本中世都市の世界』ちくま学芸文庫、2001 年（筑摩書房、1996 年））。

お湯をもらいに来たこともあったという。赤井さんはこのエピソードに触れて、「街角広場」には「駆け込み寺的な要素もあるようです」*3) と話している。

人々が「街角広場」に助けを求めるのは、このように緊急の時だけではない。

赤井：人の一時預かりもしてます。「ちょっと家掃除するから、車椅子のおじちゃん預かってて」。「子ども、ちょっと買い物行くから、この子どもら 2 人置いといていいですか」って、「どうぞ」言うと、遊んでます、そこで、お母さん買い物に行ってる間。何でも一応できることは、やれてしまうんですね。

赤井：夕方学校から帰りましたら、「街角広場」の前の広場で、子どもたちが遊びます。そこでは喧嘩もあります。……。そんな時は、みんな「街角広場」に子どもたちが入って来ます。……。怪我したら、泣きながら「転んだ」と言って、そこを手当てする、救急箱置いてますので、手当てもします。それから、喧嘩したら、「おばちゃん、あいつちょっと悪いねん」、そしたらまた喧嘩の仲裁にも行きます。

人を一時的に預かったり、忘れ物を預かったり、伝言をこつづかったり、子どもたちの喧嘩を仲裁したり、怪我を手当したりというように、「街角広場」では（たとえそれが些細なことであっても）人々の様々な求めに対してその都度の対応がなされている。

⑥地域の情報が集まる場所

「街角広場」の掲示板には、「せっかくだから、ここを起点として学校の情報を外に出すことを考えたらどうですか?」という赤井さんの呼びかけによって、近くの小・中学校の学校通信が掲示されている。

赤井：小学校はもうマメな校長がいて、学校通信をせっせせせせと作っては、父兄にも渡してるけれど、……。[「街角広場」には] カラー刷りのものを持って来て貼ってる。それをみんな、子どもも大人も、地域の人もみんな読んでます。……。中学生っていうのはね、家帰って、男の子なんか学校からもらったお手紙出さないんですよ、親には。で、親にとってみたらほとんど学校からの連絡が来ないのが、「街角広場」へ来れば、その学年だけじゃなくて、違う学年、学校全体の色んな情報が得られるって言って、それはもう最近はお母さんたちがよく読みに来ますね。

学校通信の他にも、掲示板には地域新聞『ひがしおか』や地域行事のお知らせなど様々なものが掲示されている（写真 11）。けれども、掲示板には様々なものがとにかく貼ってあればいいというわけではない。期日の過ぎたものが掲示されっぱなしの掲示板や、情報の更新が遅い掲示板は、掲示板としての役割を果たさないのである。そのため赤井さんは、掲示板の整理をすることが毎朝の仕事になっていると話している。

ただし、掲示物のように意識的に提供しようとしている情報だけが「街角広場」に集まってくるわけではない。「街角広場」は地域の人々が出入りする場所であるため、その出入りに伴って必然的に地域の様々な情報がもたらされることになる。このような情報はおしゃべりをしたり、あるいは、他の人々のおしゃべりを耳にはさんだりすることによってさらに広まっていく。

赤井：例えば〇〇さんが奥さん連れて来てね、介護、今度見直してもうたら要介護になったとか、介護1になったとか、3になったとか、そういう話をしてるでしょ。で、どこへヘルパーさん来てもらうとか、どこへどんなふうな行ってるとかいう話をここでしてたら、……[そこに居合わせた]人がそういうことを聞いてね、で、[情報が]入ってくることもある、ね。……、別に自分が情報収集に来てるわけでもなくて、人の話を聞いたら、……

赤井：だからここなんか、……、もうそれこそ実際顔合してるのこれだけでしょ。……、誰と誰がどこで独り住まいしてることみんな知ってるわけです。……、で、それこそ、何か「夜電気がついてない、今日はおかしい、電気ついてへんから」言って、見に行ったりしてるわけですよ。そういうのが地域コミュニティだと。

「地域の情報の交差点」と赤井さんが話しているように、「街角広場」には地域の様々な情報が集まってくる。加えて重要なのは、「街角広場」には様々な情報が集まっている（と、地域の人々が思っている）がゆえに、「街角広場」の存在自体が、「直接誰に言ってわからないことを、ここで大きな声で叫べば誰かが聞いてくれる」と赤井さんが話しているような、いわばメタレベルの情報をも人々に提供しているということである。

このように「街角広場」は地域の人々にとって非常に豊かな意味をもつ場所になっている。近年、「街角広場」のような喫茶スペースが各地に同時多発的に開かれており⁴⁾、今後もこのような喫茶スペースが各地に開かれていくと思われる。「街角広場」を見学しに来る人も多いと聞く。それ程までに「街角広場」のような場所が求められているのである。それゆえ、「街角広場」のような場所の運営がどのようにして成立しているのかは非常に気になるところである。

そこで以下では、地域環境を物理的・社会的にデザインしていくうえで「街角広場」からどのようなことを学ぶことができるのかを考えてみたい。

●「場所の主（あるじ）」と地域における環境デザイン

劇作家・演出家の平田オリザは、空間を「プライベート（私的）な空間」、「セミパブリック（半公的）な空間」、「パブリック（公的）な空間」の3つに分類している（図1）⁵⁾。また、「すでに知り合っている者同士の楽しいお喋り」

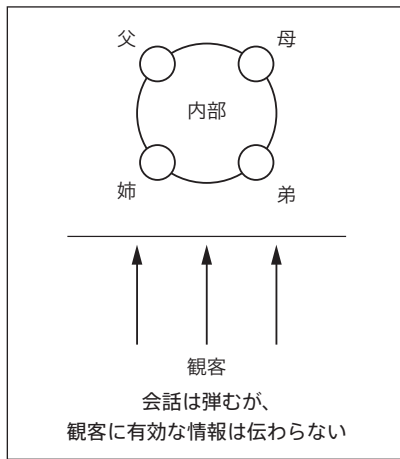


移転前の掲示板

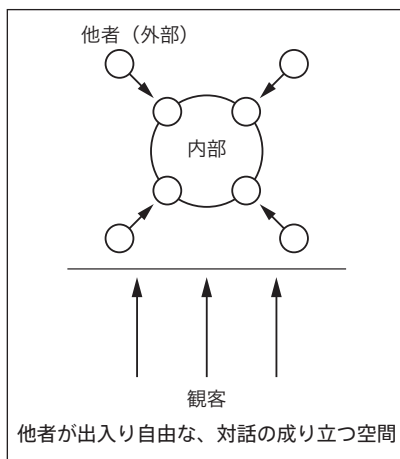


移転後の掲示板
(写真11) 掲示板

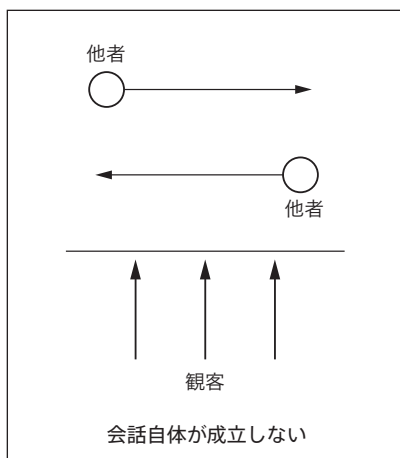
⁴⁾ このような喫茶スペースは「コミュニティ・カフェ」や「まちの縁側」と呼ばれることもある（久田邦明「各地に広がるコミュニティ・カフェ」・『月刊公民館』NO.556, 2003年9月号。久田邦明「コミュニティ・カフェの可能性」・『月刊社会教育』No.584, 2004年6月号。延藤安弘「ヒト・コト・モノの共生の場としての〈まちの縁側〉」・『季刊まちづくり』第6号, 2005年3月）。



プライベートな空間



セミパブリックな空間



パブリックな空間

(図1) プライベートな空間・セミパブリックな空間・パブリックな空間

を「会話」、「他人と交わす新たな情報交換や交流」を「対話」と分類している⁶⁾。家の茶の間のような「プライベートな空間」では、見知らぬ人同士の「対話」が生まれにくい（そもそも、家の茶の間に見知らぬ人が居るという状況は考えにくい）。「道路や広場といったパブリックな空間」でも、「ただ人々はその場所を通り過ぎるだけだから、会話自体が成り立ちにくい」。このように、「プライベートな空間」も「パブリックな空間」も見知らぬ人同士の「対話」が生まれにくい。それに対して、「セミパブリックな空間」でなら見知らぬ人同士の「対話」が生まれやすいと平田は述べている。

それでは、私たちの身の回りにはどのような「セミパブリックな空間」が存在しているのだろうか？ そこで、見知らぬ人と自然におしゃべりしたり、世間話したりできる（場合によっては、その人と顔見知りになりやすい）のはどのような場所かを思い浮かべてみたいと思う。まず思い浮かぶのは、カルチャースクールや地域行事、学校行事で見知らぬ人と話をするという状況である。このような状況は大いにあり得るが、カルチャースクールは予定を立ててから訪れる場所であり、地域や学校では行事が毎日行われているわけではない。つまり、カルチャースクールや地域行事、学校行事には自分が行こうと思った時に行けるわけではない。

そこで今度は、習い事や行事ではない場所に限定して、どのような場所があるかを思い浮かべてみたい。気が向いた時にふらっと見知らぬ人の家のドアをノックして世間話をする、ということはまずあり得ない（そんなことをしたら警察に通報されるだろう）。駅や交差点でたまたますれ違った見知らぬ人に声をかける、というのもそう多くは起こらない（もし声をかけた相手が子どもなら、誘拐犯と間違われかねない）。けれども、八百屋の人となら「今日は何が安い？」、「これはどうやって料理したら美味しい？」と、洋服屋の人となら「この服似合ってますか？」とごく自然におしゃべりすることができる。散髪屋や美容院で、散髪してもらっている間に世間話をするのは（たとえ初めて訪れた散髪屋や美容院であっても）自然である。図書館の司書には、本について色々と尋ねることができる。家の前で植木の手入れをしている人がいれば「きれいな花ですね」と、畑で農作業している人がいれば「昨日の雨は助かりましたね」と、通りがかりに声をかけても不自然ではない。

ここに例としてあげた、自然におしゃべりしたり世間話したりできる人にはどのような共通点があるだろうか。それは、これらの人々はある特定の場所に（いつも）居て、その場所を大切に思い、その場所において何らかの役割を担っているという、いわば「場所の主（あるじ）」と呼べるような人物になっていることである⁷⁾。「場所の主」とは、ある場所をその人抜きで想像することができないような人物であるといってもいい。

平田は「セミパブリックな空間」の特徴として「『内部』の人々に対して、『外部』の人々が入り自由である」ことをあげているが（図1）、「場所の主」はまさに平田のいう「『内部』の人々」になっている。つまり、見知らぬ人ではあっても、その人が「場所の主」ならば自然におしゃべりしたり世間話をしたりすることができるのである。もちろん、このような人となら顔見知りにもなりやすい^{8,9)}。

*5) 平田オリザ『演劇入門』講談社現代新書、1998年

*6) 平田は「対話」の相手となる「他人」について、「他人といっても、必ずしも初対面である必要はない。お互いに相手のことをよく知らない、未知の人物という程度の意味である」と述べている。

一方、「パブリックな空間」では「会話自体が成り立ちにくくなる」というのも注目すべき指摘である^{*10)}。これは、「パブリックな空間」には「場所の主」が存在しないからだと考えることができる。癒着が起きないようにと運営者がどんどん変わっていく公共施設、人々が自由に運営に関わったり、展示したりすることが禁止されている公共施設は、あえて「場所の主」を存在させないようにしているとはいえないだろうか。もちろん癒着が起きることや、特定の人々が自分勝手に運営に口出ししたり展示したりすることは好ましいことではないが、それを恐れるあまり雁字搦めの規則によって「場所の主」が存在する可能性を事前に摘み取ろうとする考え方は、端的に言って人間を信頼していない。もしも、公共施設ではあえて「場所の主」を存在させないようにしていると考えることが間違いでなければ、地域の場所を公共施設によって置き換えていくほど、地域の人々から他者と顔見知りになる機会を奪ってしまうことになるのではないかと。こう考えるのもそれ程の外れではないように思う。

話が大きくなってしまったので、「街角広場」へと話を戻したい。先に述べたように「街角広場」は地域の人々が顔見知りになれる場所であった。この「街角広場」を「場所の主」という観点から改めて見直せば、月曜日といえば〇〇さん、火曜日といえば〇〇さん、……、土曜日といえば〇〇さん、写真といえば〇〇さん、ペンキ塗りといえば〇〇さん、パンといえば〇〇さん、〇〇といえば……、ちょっと振り返るだけで、「街角広場」を大切に思い、それぞれの役割を担うたくさんの「場所の主」を思い浮かべることができる^{*11)}。地域の人々が顔見知りになれるという意味において、「街角広場」に多くの「場所の主」が存在していることは決定的に重要である。

「場所の主」が重要であることは、赤井さんも認識されているのではないかと。次のように、赤井さんは「街角広場」のモデルとして「お寺の庫裡のお部屋」をあげているが、この話の中に出てくる「お寺の奥さん」はまさに「場所の主」である。

赤井：私がモデルに思ったのは、……、お寺の奥さんっていうのは、もう四六時中そんな人が来て、一日しゃべってますよ、ね。で、お寺の奥さんは聞き置きだけで、それを口外するやなし、ここへ来てみんなが色々なことしゃべって、まあ色々な人が来て、ここをサロンみたいなもんですよ、お寺の庫裡のお部屋っていうのはね、……。だから私は、そういうお寺のね、奥さんのような人が誰かおって、そういう人の話をね、聞き置きだけしてあげる。……。そういうふうなね、場所があるんじゃないって、ここ〔千里ニュータウン〕にも。

「街角広場」から学ぶべき最大のことは、地域に「場所の主」が存在することの重要性和その可能性だといってもよいだろう。

以下では、「街角広場」は極めて意識的な考えに基づいて運営されていることをみていくが、「街角広場」の運営を支える考えは、「場所の主」を存在させるようなデザインとはどのようなものか？ 人々が「場所の主」と自然に触れることのできるようなデザインとはどのようなものか？ という問いに対す

*7) 田中康裕、鈴木毅、奥俊信、松原茂樹、木多道宏「場所の主（あるじ）の観点からみた異世代の顔見知りの人との接触についての考察—子ども・若者にとっての地域環境—」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）』E-1分冊，pp.1131-1132，2007年8月）

なお、この論文では仲間でも、かといって全くの他人でもないような顔見知りという関係を「中間的な関係」と呼んでいる。

*8) ただし、八百屋の人に「あなたの趣味は何ですか？」と突然声をかけたり、家の前で植木の手入れをしている人に「この洋服は似合うと思いますか？」と突然声をかけるのは不自然である。図書館の司書に「今日の晩ご飯は何？」と突然声をかけるのも不自然である。このことから、見知らぬ人とのちょっとしたおしゃべりや世間話は場所とセットになっていることがわかる。なお、ここではどのような人であれば自然におしゃべりしたり世間話をしたりすることができるのかを考えてきたが、逆に、どのような人であれば声をかけられた時に不信感を抱かずにすむのかを考えてみたい。例えば、道端で見知らぬ人に突然声をかけられ、その人が世間話を始めたら「何かの勧誘ではないか？」と不信感を抱いてしまうかもしれない。見知らぬ人が家のインターホンを鳴らして、話を始めたら「もしかすると悪徳商法か？」と警戒してしまうだろう。けれども、お店の人に声をかけられ、世間話を始めるというのは大いにあり得る。このように逆の場合を考えても、「場所の主」の存在が浮かびあがってくる。

*9) ここでは「プライベートな空間」と「パブリックな空間」とが両極にあり、その中間に「セミパブリックな空間」があるという枠組みで議論をすすめているが、「公共的なもの」と「公的（パブリック）なもの」との間にこそ対立があるのだと指摘されることもある。山本は「公共的なもの」と「公的（パブリック）なもの」とを区別し、プライベートなものを消し去ろうとする「公共的なもの」に対して、「プライベートなものを生かす状態がパブリックである」と述べている（山本哲士『ホスピタリティ原論』新曜社，2006年）。この枠組みに従えば、「場所の主」が居るような場所こそが「公的（パブリック）」な場所であるといえる。

*10) 「パブリックな空間」であっても、見知らぬ人とのおしゃべりや世間話が全く起こらないわけではない。ゴッフマンがあげている警官や牧師といった「単なる職業的關係以上のかかわりをもたなければならない社会的立場の人」、老人や子どもといった「広い範囲の人びとから接近を受ける立場の人」に対してであれば、あるいは、酔っぱらいや奇抜な衣裳を身に着けている



(写真 12) 内モンゴル・フフホトの公園

人といった「個人が役割を離れている場合」、つまりいたり滑ったりして「ある人の身体的位置が一時的に変わる時」、「道で何かを落してそれに気がつかない時」であれば、「パブリックな空間」における見知らぬ人とのおしゃべりや世間話は起こり得る（E. ゴッフマン（丸木恵祐，本名信行訳）『集まりの構造』誠信書房，1980 年）。

平田も「プライベートな空間」や「パブリックな空間」であっても、「舞台の『背景』あるいは『状況』」を工夫すれば見知らぬ人同士の「対話」が生まれると述べている（平田オリザ『演劇入門』講談社現代新書，1998 年）。

余談になるが、今春留学生の方に中国・内モンゴルのフフホト（呼和浩特）を案内してもらった（写真 12）。フフホトの公園は非常に魅力的な場所であり、早朝から多くの人々が体操したり、釣りをしたり、社交ダンスをしたり、バトミントンをしたり、歌を歌ったりしていた。その中で一番驚いたのは、水を含ませた筆で地面に字を書いている人がいたことである。（日本にこのような人はいないが）地面に字を書いている人になら「何を書いているんですか？」、「これは〇〇の詩ですね」と自然に声をかけることができそうである（写真の中央には、地面に書かれた文字をじっと読んでいる人が写っている）。もちろん、地面に字を書いている人は、法的には公園の管理をする役割を担っているわけではないだろう。けれども、公園に（いつも）居て、そこを大切に思っている人であるとはいえ

る大きなヒントを与えてくれるように思う。

①いつでも開いているお店であること

地域の人々がふらっと訪れることのできる場所を実現するうえで、いつでも開いていることは重要である。赤井さんが次のように話しているように、「いつでも行ったら開いてる」ことが地域の人々に大きな安心感を与えるのである。

赤井：始めた時の趣旨としましては、何はともあれ、毎日する。……、週に 1 回とか、月に何回というのは、誰でもいつでも行ってみようかなと思った時に行けない、自由に出入りしてもらえない。……、いつでも行ったら開いてるという安心感が一つの目的で毎日やっておりました。

また、「街角広場」でコーヒー・紅茶が飲めることも重要である。

コーヒー・紅茶を飲むことは些細なことかもしれない。けれども、些細なことであるがゆえにふらっとコーヒー・紅茶を飲みに行けるし、逆に、行かないことにも理由をつけなくてもいいのである。コーヒー・紅茶さえ注文すれば何をしていても、何かをしなくても怪しまれることなくそこに居ることができるし、もしも苦手な人が居ればコーヒー・紅茶を飲み終えてすぐに帰ることもできる。コーヒー・紅茶を飲むためだけにやって来た「ふり」をすれば、すぐに席を立つことは少しも不自然ではない。一方、何らかの活動に参加するために訪れたのであればそうはいかない。そもそも、何らかの活動に参加しなければならないような場所にはふらっと訪れることはできないし、休みたくなった時には「ちょっと身体の具合が悪い」などと仮病を使わなければならない。また、活動が終わる前に帰るのは不自然であるから、その場合には「急用ができたから」などと言いつづける必要がある。

コーヒー・紅茶の「お気持ち料」が 100 円というのも重要である¹²⁾。コーヒー・紅茶が 1 杯 500 円なら気軽に飲みには行けない。ただし、コーヒー・紅茶が無料であっても気軽に飲みに行けないように思う。もしも無料ならば、「あの人は無料だからって毎日来てる、せこい人だなあ」、「無料のコーヒーしか飲めない程貧しいのだろうか？」などと噂されてやしないかと余計な気を使うことになるだろう。

このようなことが運営当初からどれ程意識されていたのかはわからないが、「街角広場」がコーヒー・紅茶が安く飲めるお店として運営されていることは重要である。

②あらかじめ運営内容を固定してしまわないこと

「街角広場」は当初の計画通りに運営されているわけではないし、そもそも、オープンまでに多くのことが計画されていたわけではない。赤井さんが次のように話しているように、「街角広場」は「来る人のニーズに合ったものをつくっていく」という考えに基づいて運営されている。

赤井：「街角」オープンする時にね、すごい心配したんですよ、行政は。

何にも決まらない。[私は行政に]まず、場所をオープンしましょう。オープンしてやっていく中で、色んなことのニーズが出てくるから、そのニーズに合わせて動きましょう。でないと、人の意見を聞くなんてね、リサーチしても、それはごく一部分しか出てこないわけでしょ。だから、やってみた中で色んなことがね、その場に合うものが生まれてくるはずだから、そうしましょうと言ったんだけど。

赤井：あんまり場所づくりしたところで、こちらの押し付けがあったらだめなんですよ。だから、はっきり言えば来る人がつくっていく、来る人のニーズに合ったものをつくっていく。こちらの押し付けはね、やっぱり無理なところがあると思いますね。

もちろん、コーヒー・紅茶が飲めるようにするという最低限のことはオープンまでに計画されていた。けれども、どのようにコーヒーをいれるのかまでは決められておらず、コーヒーのいれ方は運営が始まってから実際にドリップを使ったり、コーヒーメカを使ったりするという試行錯誤によって決められている。また、赤井さんはコーヒー・紅茶の「お気持ち料」が100円というのも、深く考えて決めたわけではないと話している。

赤井：「何をしよう」って言って、「まず地域交流、コミュニケーションの場所が欲しいんだから、まあお茶ぐらい飲めるようにしましょうよ」。で、お茶を飲むのはどうしたらいいか、「じゃあ、素人ができることだから、紅茶かコーヒーぐらいしかないねえ、日本茶も出しましょう」、それぐらい、誰がどんなふうに容れるかかも何も決まっていません。もう、ほんとうに、あの、今から考えたら恐ろしいようなかたちでオープンしました。

赤井：一番初めに、「どれぐらいにしょ」言って決めて、でもね、150円ってカウントも面倒臭いしね、出す方も大変、「100円ぐらいが一番出しやすいかな」って言って、そんな程度で決めてるんです。だから、ほんとに、深く考えてない。いや、そら、初めの時に、「やり出しましょうや」って、色んなこと考えながらやって、その時不都合であればそれ直していけばいいんだから。

結果として「お気持ち料」が100円というのは変更されずに今に至っているが、不都合が生じた場合には当初の計画にこだわるのではなく、それを変更しようと意識されていることがわかる。

また、「街角広場」では地域の人々の様々な求めに対する手助けがなされていることをみたが、決して対応可能な要望一覧などというメニューリストが作られているわけではない。地域の人々の様々な求めに対しては、「門前払い」することなくその都度できる範囲での対応がなされているのである。

る。従って法的に管理しているか否かではなく、ある特定の場所に（いつも）居て、そこを大切に思っていることが「場所の主」の基本になると思われる。

*11) 地域にどのような人々が暮らしているのかを認識することは重要である。ここで述べたように多くの「場所の主」の存在を思い浮かべることができるということから、人々は「場所の主」になることでその存在が認識されやすくなると考えることができる。これは、人々は「場所の主」としてその存在が可視化されている、ということでもある。

*12) 「街角広場」でコーヒー・紅茶を注文した人はテーブルの上に置かれた貯金箱に「お気持ち料」100円を入れることになっている。ただし、「お気持ち料」100円というのはあくまでも目安であり、中には100円以上を貯金箱に入れる人も聞いたことがある。

なお、「街角広場」では飲物しか提供されていないが、食べ物は自由に持ち込むことができる。

赤井：だから、まあ、私たちの考えとしては、色んなことがあっても、どんなことにでも、一応は1回は受け止める対応をしようって。知らん顔はね、もう門前払いは一切してないんですよ。で、門前払いを何か1回でもしてしまうとね、人がもう立ち寄らなくなるでしょ。門前払いはもうしないで、受け止めてます。受けられるものかどうかは、またね、別として。

これより、「街角広場」の運営はあらかじめ計画された通りのものではなく、何らかの出来事へのその都度の対応の集積であると見なすことができる。

「誰にでも同じことがなされることを、その至上課題にしている」サービスに対して、「ひとによって個々ちがってくる」ものがホスピタリティと呼ばれることがある^{*13)}。ホスピタリティという言葉はしばしば歓待と訳されるが^{*14)}、人々の様々な求めに対してその都度の対応がなされている「街角広場」の運営は、「やってくる客をめぐる規定される」ものとしての^{*15)}、あるいは、「顧客を受け入れるパッシブな場においてとられる行動」^{*16)}としてのホスピタリティだといえる。

③組織立たないこと

近年、各地に開かれている「街角広場」のような喫茶スペースの中には、NPOによって運営されている場所も多い。けれども「街角広場」では、NPOになるとこれまでのように柔軟に運営することが難しくなるからと、あえて制度にのることが避けられている。

また、「街角広場」では既存の組織に基づかないで運営することが意識されている。当初「街角広場」ではボランティアスタッフの人数を確保するために自治会連絡協議会、公民分館、校区福祉委員会、地域防犯協会といった地域の既存の組織が曜日ごとに運営を担当していた。けれども、半月もたたないうちに組織に所属していない人が手伝いにくいといった不都合が出てきたという。

赤井：初めはボランティアの確保が心配だったんです。ですから、……、地域の団体で当番制にしましょう。福祉の当番日、防犯の当番日、公民分館の当番日、それから自治会の連合会の当番日。そういうふうに関番日を決めて、その人たちが当番で入るようにしました。ところが半月も経たないうちに、都合が悪いから今日は出られないからって。そうすると、何か今日は〇〇の日ですよとか、〇〇関係以外の人何か入りづらい。それから、あの、〇〇担当の日は、〇〇関係者以外は何となく、覗いて見て、「ああ今日は〇〇の日や」って人が帰るようなことがありました。それで、それも一切なしにしましょう、ここに入るボランティアは、みな袖脱いで、肩書き脱いで、個人として入りましょうということにしました。それで、全くそういう何の団体にも関係の無い方々のボランティアで今もずっときております。……。そういうことがあるので、個人でやれたボランティアっていうのが、ここではまた一つ大きな成功の、大きな原因だったかなと思ってます。

*13) 山本哲士『ホスピタリティ原論』新曜社、2006年

*14) 山本は『「ホスピタリティ」に日本語でぴったりはまるものがない。もてなし、歓待、歓迎、しつらえ、あつらえ、あえ、等等いろいろ部分をしめすものはあるのだが、標準語の世界からは消されていったようだ』と述べている。ただし山本は、筑後地方の「方言である『ほとめき』がホスピタリティにぴったりあてはま」り、このことは「資本・ホスピタリティの経済において『場所』がおおきな意味をもつその証である」と述べている（山本哲士『ホスピタリティ原論』新曜社、2006年）。

*15) ルネ・シェレル（安川慶治訳）『歓待のユートピア』現代企画室、1996年

*16) 山本哲士『ホスピタリティ原論』新曜社、2006年

現在「街角広場」では、ボランティアスタッフがカレンダーに自分の名前を書き込んで、空白になっている日を埋めていくという方法によって担当日が決められている（写真 13）。

④既存の組織を横断すること

「街角広場」では既存の組織に基づかずに運営しようとしていると述べたが、このことは「街角広場」が地域と何の関わりも持たずに運営されているということを意味するわけではない。

赤井さんが次のように話しているように、「街角広場」は周囲の近隣センターの商店へ配慮して運営することが意識されている。

赤井：「街角広場」で必要なものは、この商店街ですべて調達しております。

この商店街で調達できるものは全て。調達できないものは仕方がない、この商店街にないものは他所で買いますけど、たぶん全部買ってます。

また、掲示板に小・中学校の学校通信を掲示したり、地域の様々な団体が実施する行事のお知らせを掲示したりというように、「街角広場」では地域の人々と組織とを積極的に媒介しようとしている。つまり、「街角広場」の運営は既存の組織の枠組みを横断しようとするものであるといえる。このことは、ボランティアスタッフにも当てはまる。既存の組織が曜日ごとにボランティアスタッフを担当していれば、既存の組織の枠組みが消えることはない。けれども、既存の組織に基づかないで運営すれば、（少なくとも「街角広場」においては）既存の組織の枠組を横断した関係が築かれるのである。

なお、代表の赤井さんは「街角広場」を開く以前から PTA や公民分館などを通じて地域と関わり続けてきた人物である。赤井さんは、これまで地域と関わり続けてきたことが、今の「街角広場」の運営にもつながっていると話している¹⁷⁾。

赤井：学校との関わりを持つことも、校長、教頭ともずっと、小学校も中学校も、ずっと私がそういうのしてるから、学校もそういうふうなかたちで気を許してくれたり、色んなかたちでオープンにしてくれたっていうのは、私がここへ来て 30 年って言うか 40 年近く、ずっとあの地域活動、色んなかたちでしてますよね、それが全部生きてきてると私は思います。

赤井：長い間〔地域で〕色んなことしてるから、どこに何が、どんなものが、財産が眠ってるのがあるっていうのが、ある程度わかるので、みんなひっぱり出してきて、使えることにしてます。……、地域活動色々やるから、色んなとこの関連がわかりますので、……、この関連とこの関連と結びつけてこういうことができるとか、こんなふうにしたらいいいとか、そういうことも割にやりやすいので、そういう意味では、あの、幅広い活用とか活動、使い方ができてるかなとは思いますね。



（写真 13）ボランティアスタッフの名前が書き込まれたカレンダー

¹⁷⁾ 赤井さん以外のボランティアスタッフや「街角広場」を訪れる人の中にも、PTA や自治会活動などを通じて地域に関わってきた人がいる。また、PTA や自治会活動のような積極的なかたちではないにしても、それぞれの人々は日々の暮らしを通じて、地域で何らかの関係を築いてきたはずである。このように、それぞれの人々が地域で築いてきた関係も、「街角広場」の運営につながっていると考えられることができる。

⑤主客の関係を固定してしまわないこと

赤井さんは、「街角広場」のボランティアスタッフに対して次のようなことを話しているという。

赤井：スタッフにも、肩肘はらないでゆったりとして、もう何の規制もしておりません。ただ、言ってることは、「コーヒー、紅茶をいれる時は、気持ちをいれて、お紅茶、コーヒーをいれること、雑く扱わないでください」ってということだけは言うてはございますけど、それよりあとのことは、何の決まりもなくやっております。

赤井：いい加減なことはしないでこうっていうこと、やっぱりお気持ちだから、お気持ちはちゃんときちんとしたことでこちらの気持ちは伝えるけれども、あの「ねばならない」とかね、そういう縛りはしてない。

「街角広場」にはボランティアスタッフに対する運営のマニュアルは存在しない。もちろん、このようにすれば「お気持ち」を伝えることができるというマニュアルも存在しない。「街角広場」においては、他律的なマニュアルではなく、それぞれのボランティアスタッフの「お気持ち」に基づいて運営することが意識されているのである。

また、赤井さんが次のように話しているように、「街角広場」では主客の関係を固定してしまわないようにすることが意識されている（写真 14）^{*18)}。

赤井：だから別に、特別に勉強してやってるわけでもない、ほんとに普段着の生活、……、来る人も普段着で来る、その普段着同士の付き合い、フラットな、それこそバリアフリーのつきあい、それがあそこではいいんだと思うんですね。

赤井：その代わり、ほんとのボランティアですから、スタッフと、それから来訪者、まああの言い方を変えればお客さんになるんでしょうね、……、その方との垣根は全くありません。ですから時間があれば来訪者もスタッフと一緒にテーブルでお話をします。それと来訪者の方もご理解いただいているのは、素人がやっておりますから、お茶の出番が、お茶の出でくるのが遅くてもどなたも文句はおっしゃいません。……、[私は]「やってるスタッフとしてエプロンかけてる者もボランティアでしょうけれども、来ていただく方もボランティアなんですよ」って言うてんです。一生懸命エプロンかけて、待機してても、誰も来てくれなかったら「街角広場」の意味がないんです。

「街角広場」は、そこを訪れる人々が単なるお客さんとして思い思いに居られる場所というだけではなく、自分なりの役割を見出せる場所になっていた。主客の関係が固定されたものではないからこそ、このような場所が実現しているといえる。従って、そこを訪れる人々が自分なりの役割を担うことができる



時間がある時は、ボランティアスタッフも来訪者と同じように過ごしている
(写真 14) ボランティアスタッフと来訪者

^{*18)} 「街角広場」の運営はホスピタリティであると述べたが、次のように、ホスピタリティにおける主客の関係は固定されたものではないと指摘されている。「とどのつまり、『歓待』とは、客を迎え入れる者をたえずその同一性から逸脱させるものなのである。……『歓待』はそのような自己の崩れのなかにしか訪れえない」（鷺田清一『「待つ」ということ』角川書店、2006年）。「客（hôte）すなわち招かれた人質（guest）は招待者の招待者となり主人（host）の主となるのです。hôte は hôter の hôter となる。つまり客（guest）が主人（host）の主人（host）となるのです」（ジャック・デリダ『歓待の歩み＝歓待はない』ジャック・デリダ、アンヌ・デュフルマンテル（廣瀬浩司訳）『歓待について』産業図書、1999年）。

こと、即ち、人々が「場所の主」になることを可能にするうえで、主客の関係が固定されていないことは非常に重要であるといえる。

なお、まちづくりにおいてボランティアがしばしば奨励されることがある。各地の喫茶スペースの中にも、「街角広場」のようにボランティアスタッフによって運営されている場所は多い。ただし、まちづくりによってお金を稼いでいる専門家や行政の人々が、地域の人々に対してはボランティアすることを呼びかけるという構図はどこかおかしくはないだろうか。また、地域のためにボランティアを奨励する、動員するという構図が（かつてのように）悪用される可能性はないだろうか。

このようなことを考えると、ボランティアスタッフによって運営されている「街角広場」に対して、「地域に貢献しているのだから、ボランティアスタッフはお金をもらってもいいのではないか?」、「経済的に自立できるような仕組みを考える必要があるのではないか?」、「女性にばかりボランティアを押しつけているから、女性はいつまでたっても経済的に自立できないのだ」という意見が出てくるのももっともなことである。恐らく「街角広場」においても、今後配食サービスという新たな展開を迎えるような場合には^{*19)}、経済的に自立できる仕組みが検討される時がやってくるだろう。

ただし、赤井さんはボランティアスタッフによって運営することを次のように話している。

赤井：ボランティアの人は一銭ももらわない。色んな周りの人が気をつかってくれてね、「せめてお昼ご飯でも」とかって。……時間給いくらってきちっとしたことができればいいですよ。でもそういうことができない中途半端なことしたら、……、あの人たちはいくらかでもお金をもらってるとなったら、……、今度はお金を出した方と、もらってる方に、まあ人間ってすぐそうなりますよね。それよりも、みんなどっちもボランティア。だから来る方もボランティア、お手伝いしてる方もボランティアっていう感じで、いつでもお互いは何の上下の差もなく、フラットな関係でいられるっていうのがあそこが一番いい。

ボランティアスタッフで運営されていることが主客の関係を柔軟なものにし、そのような主客の関係が多様な「場所の主」を生むことにつながっているとすれば、ボランティアスタッフにお金を支払えば済むという程話は単純ではない。また、ボランティアスタッフにお金を支払うとなれば「お気持ち料」100円を維持することも難しいだろう。それではどうすればいいのかという名案があるわけではないが、今後実施されるであろう配食サービスにおいては経済的に自立する仕組みが検討される必要があるとしても、（上に書いたことと矛盾するかもしれないが、ボランティアを減私奉公や地域にとって有用な活動として矮小化しない限り、という留保をつけたうえでなら）せめて日常的な喫茶スペースは今のようボランティアとして運営されているというのも悪くはないし、地域にはそのような場所もあっていいと思う。

*19) 配食サービスについて赤井さんは、『街角広場』では、夢だけ絶対実現してみたい夢が配食サービスです。……、『この場所でやろうか、あの場所でやろうか』と毎回、あの、まあ数名のスタッフたちとそういう構想は練ってます。でも、絶対に実現してみたい夢です。これはたぶんできるのではないかなと思いながら、日々それを目指にがんばってます」と話している。

⑥無理に関わらなくてもいいこと

「地域の交流スポット」となることを目的として開かれた「街角広場」は、いつもおしゃべりや笑い声が絶えない楽しい場所である。けれども、「街角広場」ではおしゃべりすることが無理に求められているわけではない。

赤井：それはあの自然体で。かける時もあるし、1人でじっとして、だって、話しかけられたくない人もいるかもしれない。ここへ来て1時間ぐらいじっと座ってる人もいるし。何か様子見ててね。

赤井：大きなテーブルで周りにいるのもいいだろうと思うけども、やっぱりそんなんだったら、自分1人だけのテーブルでこうやりたい時もあるかもしれない。それは、その時々で、自由に使いこなせるようなものがいみだいに思いますね。

ここで、おしゃべりしなくてもそこに居られるということ、本来はおしゃべりするのが好ましいが、嫌なら無理にはしゃべらなくてもいいという順序で消極的なものとして捉えるべきではない。「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどのような人が居るかを認識しあっている状況」である「居合わせる」という居方²⁰⁾が実現されているということも、その場所が有する積極的な価値なのである。

「街角広場」が、顔見知りになった人と無理に仲間になろうとせずとも、その後もずっと顔見知りのままでいることが許容される場所になっている背景には、人々の関わりに対するこのような細やかな配慮があるといえる。理想的な地域として「架空の下町などをモデルにした擬似的コミュニティ」²¹⁾しか想像できないような窮屈さからは、もうそろそろ卒業してもいい。

⑦ありあわせのものによってしつらえていくこと

赤井さんが話しているように、「街角広場」では自分たちの家や地域にあって使っていないもの、使われなくなったものが利用されている。

赤井：「街角広場」の場合は、ほんとにただそこにあったから、ありあわせのもの、もう一から十までありあわせを集めてこしらえたような場所です。もうそれこそ、スプーン1本、箸1本、全部持ち寄りのありあわせです。あそこにあるもので買ったものっていったら、今度できましたあのカウンターだけです。

赤井：[子どもたちに水をあげているコップは]自治会の、あの、盆踊りする時に、みんなにお茶出すの紙コップやったらもったいないからって、あれを何百って、まだすごいあるんですよ。数を買ったけど、買って1年間使ったけど、洗うのが大変だからって、そのままお蔵入りになっているのが、まだいっぱい、こんなあります。それをここへ持って来て使ってる。だから、ここ用に買ったっていうわけではない。

²⁰⁾ 鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会、2004年

²¹⁾ 鈴木は「これまで計画論などで都市におけるコミュニティや社会関係を考える際に、架空の下町などをモデルにした擬似的コミュニティを想定することが多いように思う」と述べている。また、「ある集団を想定してそれに相応しい空間をつくるというよりも、自立した個人がたまたま居合わせて思い思いに何かやっていたり、あるいは一人で居られるような空間の質が大切なのではないだろうか」とも述べている（鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会、2004年）。

オープンする時および移転する時には近隣センターの空き店舗が利用されたこと自体も、地域で使われなくなったものが利用されているという観点から捉えることができる。

加えて、「初めこの机もこんだけなかったんですよ」と赤井さんが話しているように、「街角広場」ではあらかじめ全てが揃えられてから運営が始められたのではなく、運営が始められてから必要なものが徐々に揃えられている。

このように「街角広場」には、あらかじめ計画された運営内容に従って建物が新築されたり必要なものが揃えられるというだけでなく、運営を通して徐々に必要なものが揃えられているという側面がある。つまり、「街角広場」においては、その時に必要になったもの、利用できるものに依拠してその都度運営内容が決められているのである。「街角広場」は「『もちあわせ』、すなわちそのときそのとき限られた道具と材料の集合で何とかする」^{*22)}というプリカラー・ジュによってしつらえられている場所であるといえる。

^{*22)} クロード・レヴィ＝ストロース（大橋保夫訳）『野生の思考』みすず書房、1976年

赤井さんが「本当にまとまりのないところ」、「毎日雑然とした生活をしてる」と話しているように、「街角広場」は非常に大らかな場所である。このことは、一度「街角広場」に足を運んでみればすぐにわかる。けれども、以上でみてきたように「街角広場」は（当初から）極めて意識的な「場所の主」の考えに基づいて運営されていることを見過ごしてはならない。いつでも開いているお店として日常性を大切にすること、無理な関わりを求めず、顔見知りになった人とその後もずっと顔見知りのままでいることを許容すること、運営内容や運営体制、主客の関係を固定してしまわないこと、地域の様々な組織と連携しそれを横断すること、ありあわせのものによって自分たちで徐々にしつらえていくこと、「街角広場」の運営を支えるこれらの考えからは、「場所の主」を存在させ得るようなデザインとはどのようなものか？ 人々が「場所の主」と自然に触れることのできるようなデザインとはどのようなものか？ を学ぶことができるだろう。

また、地域の場所を「交流する」、「学ぶ」、「遊ぶ」、「費やす」といった枠組みで捉えるのではなく、「人々がその場所にどのように居られるか」という観点から捉えることが必要性なこと^{*23)}、そして、そのように居られることを実現するためには場所をどのようにデザインすればいいのか？ ということを経験することもできるだろう。

^{*23)} 鈴木は「人間がある場所に居る様子や人の居る風景を扱う枠組み」を「居方」と呼んでいる（鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会、2004年）。

ここで再度、劇作家・演出家の平田オリザの言葉を参考にしたい^{*24)}。平田は、「伝えたい主義主張、テーマなど何もなくても〔現代〕演劇は成立するのだ」、「書きたいこと〔テーマ〕があるのは当たり前で、ただ、それは戯曲を書くという技術の問題とは切り離すべきだということだ」とも述べている。「私たちは、テーマがあって書き始めるわけではない。むしろ、テーマを見つけるために書き始めるのだ。それは、私たちの人生が、あらかじめ定められたテーマ、目標があって生きているわけではないのと似ているだろう。……。私たちは、生きるテーマを見つけるために生き、そして書くのだ」とも述べている。これを「街角広場」に当てはめて、「街角広場」の運営を成立させるうえで重要なのは「交流する」

^{*24)} 平田オリザ『演劇入門』講談社現代新書、1998年

場所を実現したいと熱く思うことではなく（害のない範囲であれば、熱く思っても構わないが）、「人々がその場所にどのように居られるか」を考えることだといってよいのではないだろうか。人々がどのように居られることを「交流する」というのかを見つけるためにこそ「街角広場」が運営されているといってもよいのではないだろうか。つまり、「交流する」という状態はあくまでも運営を通して事後的に見出されるものに過ぎないのである。「街角広場」を訪れる人々みな、意識的にまちづくり活動を行おうとしているわけではない。そのような人々も訪れているにも関わらず、「街角広場」を運営するという過程を通して「交流する」という状態が見出されていく。「街角広場」の魅力とその可能性はここにあると思う。

「単純な主義主張を伝えることは、もはや芸術の仕事ではない」と平田はいう。これをもじって次のようにいうのは言い過ぎになるだろうか？ 地域には「交流する」場所が必要であると人々を啓蒙することは、もはや建築計画の仕事ではない。

なお、ここではデザインという言葉は何度か用いてきたが、デザインというものをゼロから何かを作り上げるという意味で捉えている限り、「街角広場」からの学びは実りあるものとはならないように思う^{*25)}。私たちは別の意味でのデザインの可能性に目を向ける必要がある。それは、再構築（リストラクチュアリング）^{*26)}、即ち、今あるものを組み替えるという意味でのデザインである。デザイナーの原研哉がいうように「新奇なものをつくり出すだけが創造性ではない。見慣れたものを未知なるものとして再発見できる感性も同じく創造性」なのであり、「デザインは単につくる技術ではない。……。むしろ耳を澄まし目を凝らして、生活の中から新しい問いを発見していく営みがデザイン」なのである^{*27)}。

近隣センターの空き店舗を利用したり、地域の人々や既存の組織を媒介したりするというように、「街角広場」の運営は地域を物理的・社会的に再構築しようとするものであるといえる。この意味で「街角広場」の運営は環境デザインと呼ぶにふさわしい。

加えて、地域を再構築するためにはその地域をじっくりと眺め、その現状を知ることから始めなければならない。このささやかな冊子が地域を知るための一助となるのなら、アーカイブを編集すること（や、このように長々と文章を書くこと）もまた環境デザイン（の第一歩）である、と言っているように思う。

アーカイブを編集するにあたっては多くの方々にお世話になりました。

「街角広場」のボランティアスタッフのみなさま、新千里東町のみなさま、そして、（自分勝手な編集作業を温かく見守ってくださった）千里グッツの会のみなさまに、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

この編集作業を通して、「街角広場」の素晴らしさに改めて気づかされたような気がします。このような素晴らしい場所と出会い、関わる事ができたことをうれしく思います。

*25) 同様に「建築」を芸術的な建物や、建物（という物理的なもの）という意味で捉えていても「街角広場」から実りあることを学ぶことはできないだろう。舟橋のいうように、「建築」とは「“原理を弁えてものごとを生み出す術”を意味する抽象名詞」なのである（舟橋國男「トランザクショナリズムと建築計画学」・舟橋國男編『建築計画読本』大阪大学出版会、2004年）。

*26) 鈴木は「再生には、元通りにする、衰退してしまったからかつての繁栄を取り戻そう、夢よう一度的なニュアンスがどこかつきまとっている。例えばニュータウン再生が叫ばれているが、このときの課題は、元通りにしたり単に古くなった住棟を高層に建て替えることではない。時代の変化、すなわち少子高齢化や人々の価値観や社会の目標の変化に対応して、ニュータウンの環境や社会を再編成・再構築すること、新しいものを取り入れつつ、少しずつふさわしい形に組み替えていくことが本当の課題なのである」というように、再生ではなく再構築（リストラクチュアリング）という言葉を用いるべきではないかと指摘している（鈴木毅「再構築に向けて」・『建築雑誌』Vol.120, No.1533, 2005年5月号）。

*27) 原研哉『デザインのデザイン』岩波書店、2003年

新しくやって来る人もいれば、去っていく人もいる。ただ通り過ぎていく人もいれば、長い間留まる人もいる。絶えず人の出入りがあること、それによって絶えず変わりゆくこと、「場所が生きている」とはこういうことだと思います。このささやかな冊子が、変わりゆく「街角広場」の歩みを少しでも記録できていたら幸いです。

2007年11月30日

編集を代表して、田中康裕



街角広場アーカイブ '07

平成 17 (2005) 年 09 月 01 日 : 街角広場アーカイブ '05 発行

平成 19 (2007) 年 12 月 04 日 : 街角広場アーカイブ '07 発行

写真撮影 : 赤井 直, 片山北斗, 下渡純司, 鈴木 毅
田中康裕, 宮本京子, 山本 茂, 尹 俊到

裏表紙 : 太田博一

図面作成 : 太田博一, 下渡純司, 田中康裕

日誌集計 : 田中康裕, 宮本京子

年表作成 : 奥居 武, 田中康裕

編集 : 田中康裕 + 千里グッズの会

ひがしまち街角広場 〒 560-0082 大阪府豊中市新千里東町 3-6-111

TEL : 06-6831-9701

新千里東町 [http : //www.e-senri.jp](http://www.e-senri.jp)

Archive of "Higashimachi-Machikadohiroba"



2006.11.11. Hirokazu Ota